

「子どものからだと心に関する緊急調査」結果報告書



【調査概要】 調査者：子どものからだと心・連絡会議，日本体育大学体育研究所
 調査名：子どものからだと心に関する緊急調査
 調査対象：小学校 1 年生から中学校 3 年生までの子どもとその保護者
 調査時期：2020 年 5 月（休校中調査），2020 年 6 月～7 月（休校明け調査）
 調査項目：生活状況，困りごと，身体症状，精神症状等，健康診断

今回の調査は，新型コロナウイルスの感染拡大防止に伴う**突然の臨時休校が子どものからだに及ぼす影響**を検討し，今後の教育や学校について考える資料を得ることを目的として実施されました。

本調査の結果を以下のようにご報告いたします。ご不明な点等ございましたら，日本体育大学野井研究室（TEL：03-5706-1543）までお問い合わせください。

表 1 対象者の人数と性別

(人)

休校中調査	小学生						中学生			計
	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生	1 年生	2 年生	3 年生	
男子	160	161	151	170	181	154	96	46	70	1189
女子	167	163	151	165	195	148	86	70	77	1222
答えたくない	1	0	2	2	1	2	2	1	1	12
合計	328	324	304	337	377	304	184	117	148	2423

休校明け調査	小学生						中学生			計
	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生	1 年生	2 年生	3 年生	
男子	109	107	111	101	105	91	28	20	14	686
女子	105	86	83	109	96	101	34	12	17	643
答えたくない	5	2	2	0	2	0	0	0	1	12
合計	219	195	196	210	203	192	62	32	32	1341

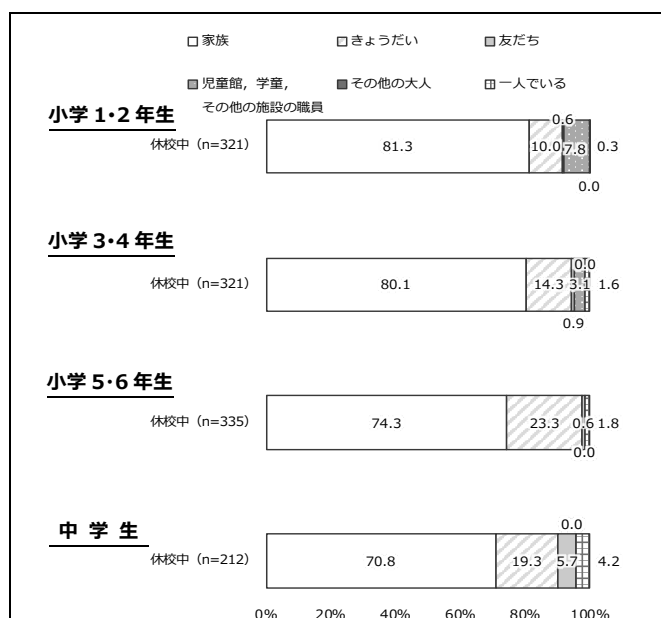


図 1 コロナ休校中に一緒に過ごしていた人の割合（男子）

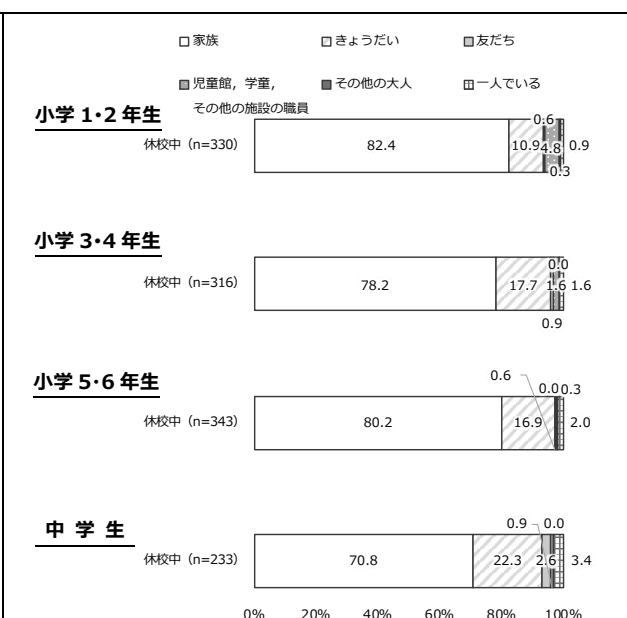


図 2 コロナ休校中に一緒に過ごしていた人の割合（女子）

休校中は家族，きょうだいと一緒に過ごしていました。

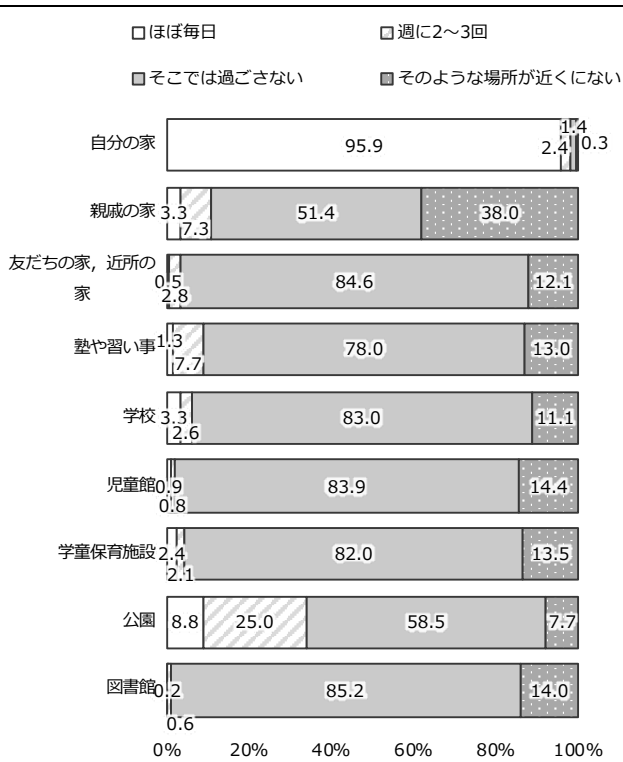


図3 コロナ休校中に過ごしていた場所の割合（男子）

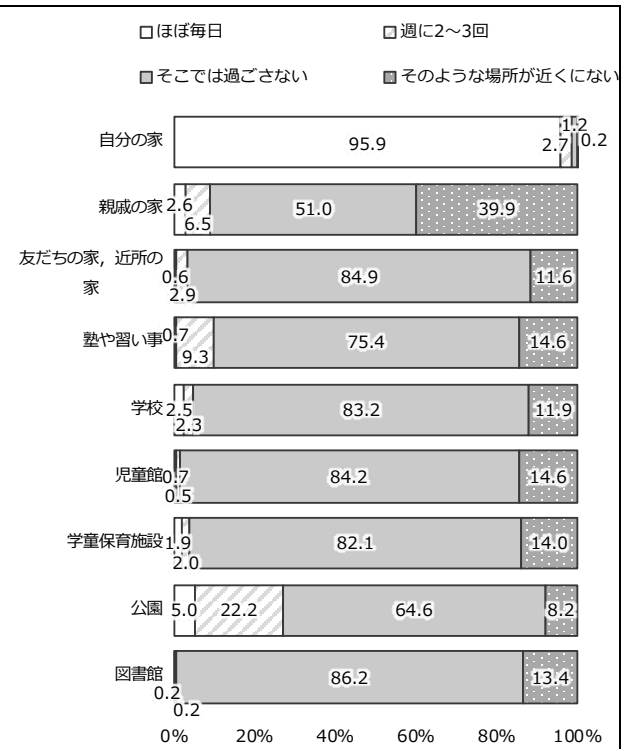


図4 コロナ休校中過ごしていた場所の割合（女子）

休校中はほぼ毎日自宅で過ごし、週 2~3 回は公園という者も 4~5 人に 1 人はいました。

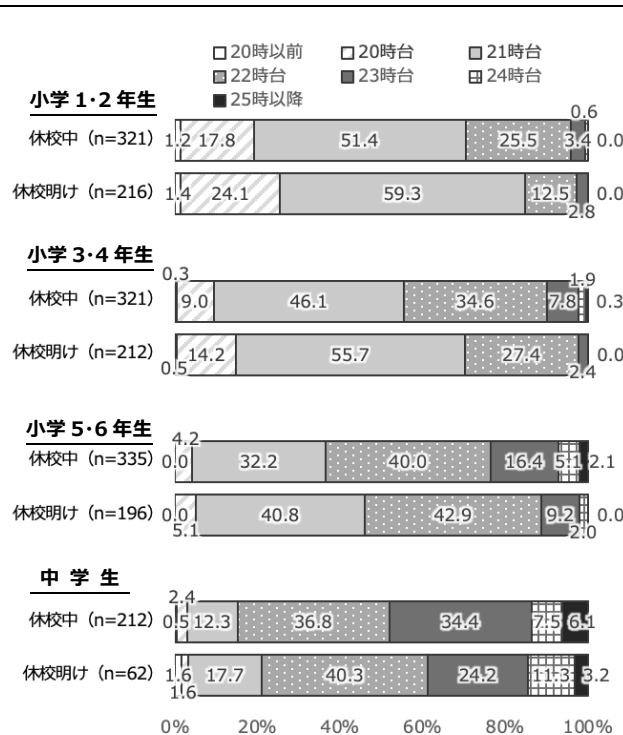


図5 コロナ休校中と休校明けの就寝時刻（男子）

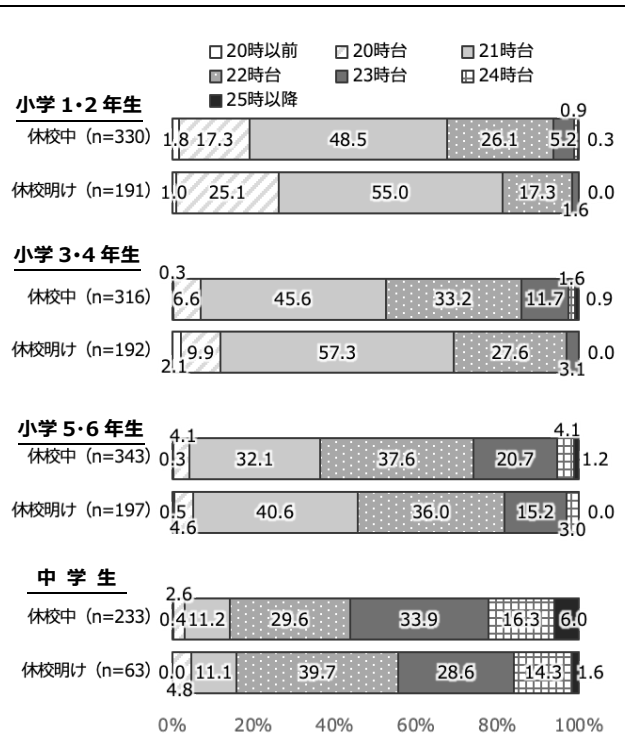


図6 コロナ休校中と休校明けの就寝時刻（女子）

遅寝傾向であった休校中の生活が、学校再開で改善しました。

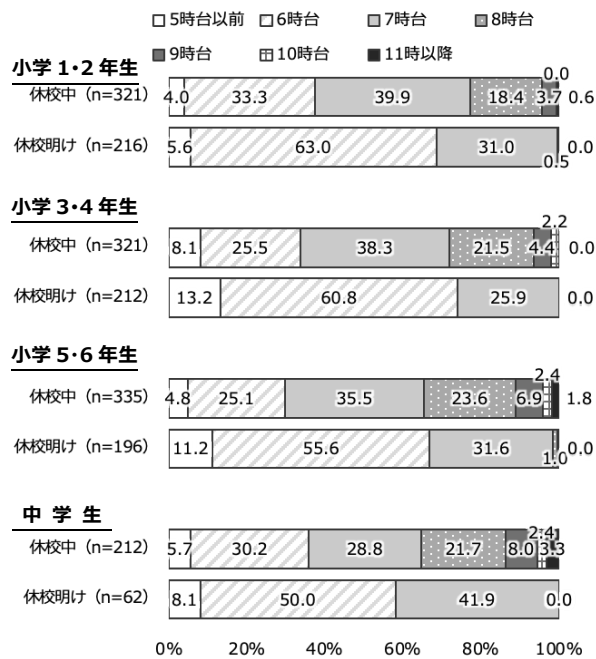


図7 コロナ休校中と休校明けにおける起床時刻(男子)

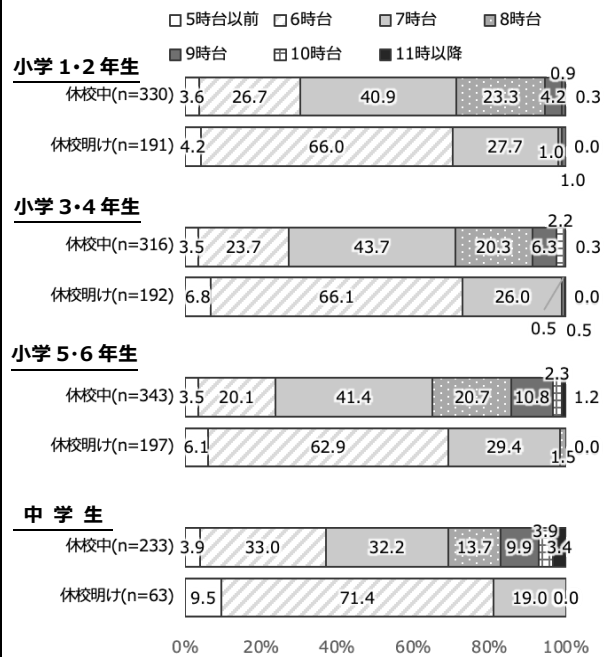


図8 コロナ休校中と休校明けにおける起床時刻(女子)

遅起き傾向であった休校中の生活が、学校再開で就床時刻(図5,6)以上に改善しました。そのため、睡眠時間の不足が心配されました。

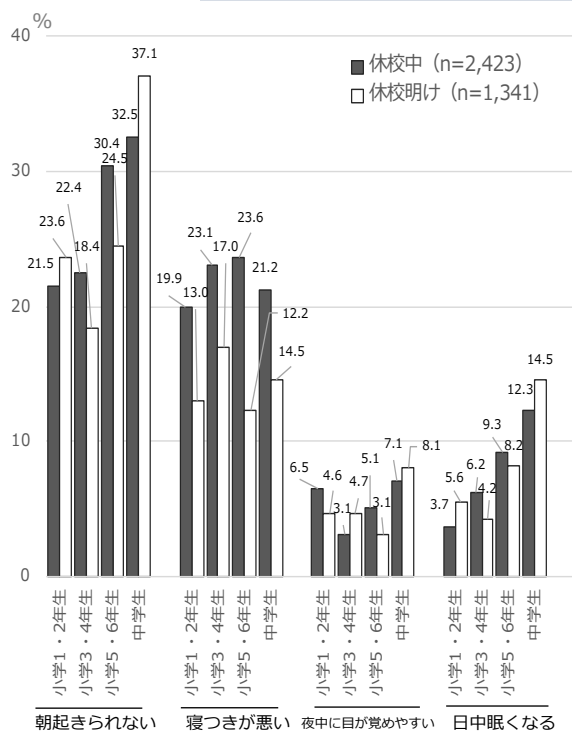


図9 コロナ休校中と休校明けにおける睡眠問題(男子)

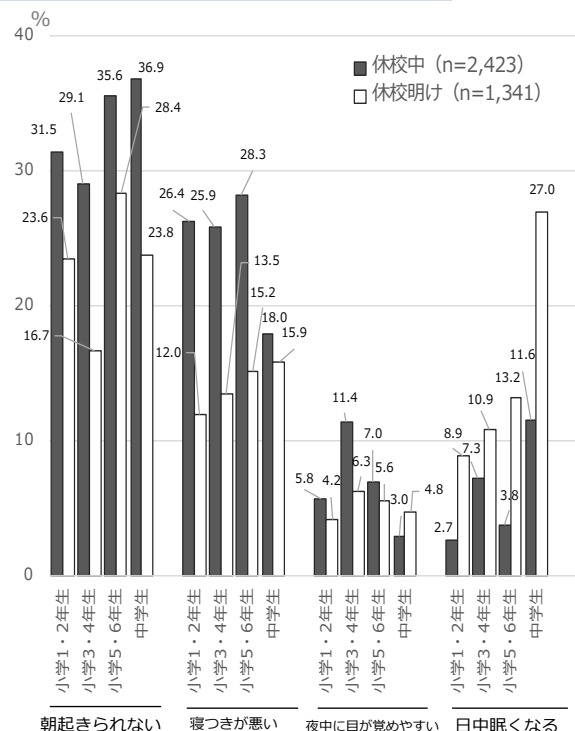


図10 コロナ休校中と休校明けにおける睡眠問題(女子)

休校中は寝つきの悪さ、休校明けは日中の眠気感を抱えていました。

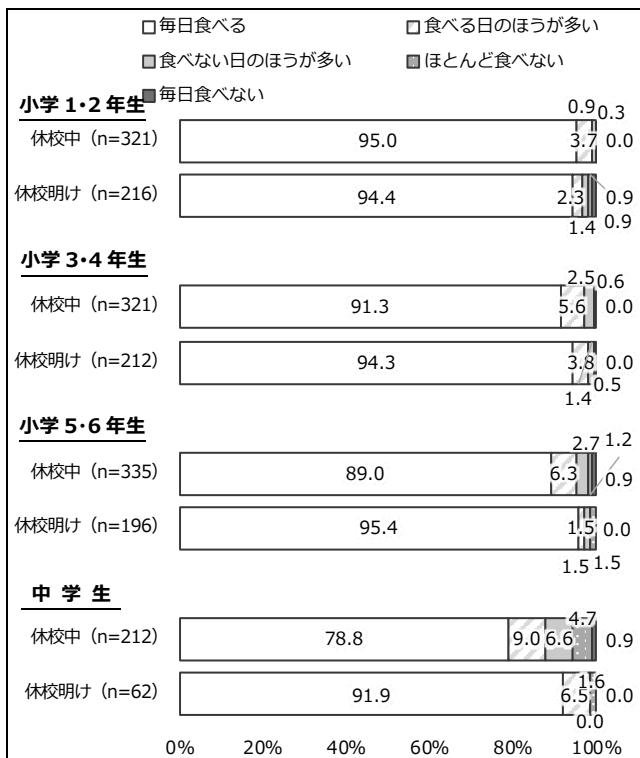


図 11 コロナ休校中と休校明けにおける朝食摂取状況 (男子)

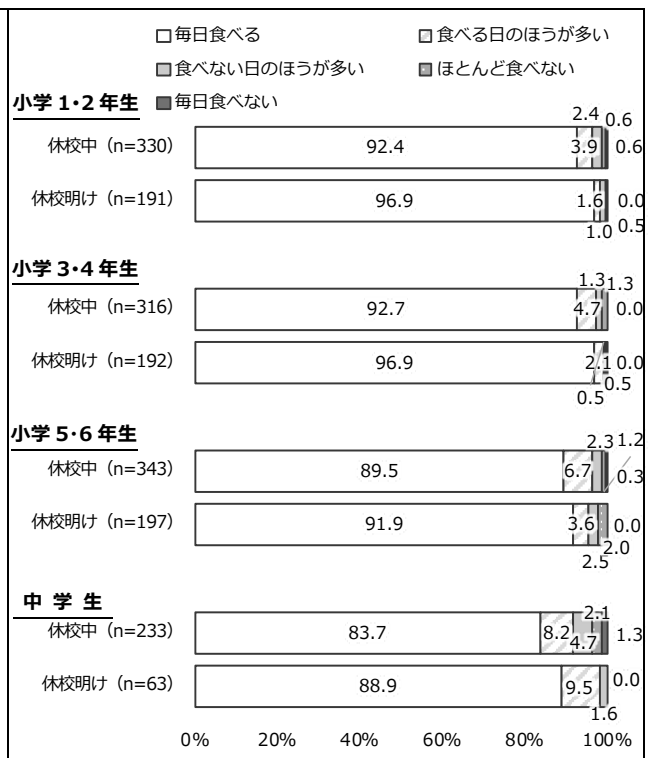


図 12 コロナ休校中と休校明けにおける朝食摂取状況 (女子)

休校中は朝食欠食が増えたものの、休校明けはそれが改善しました。

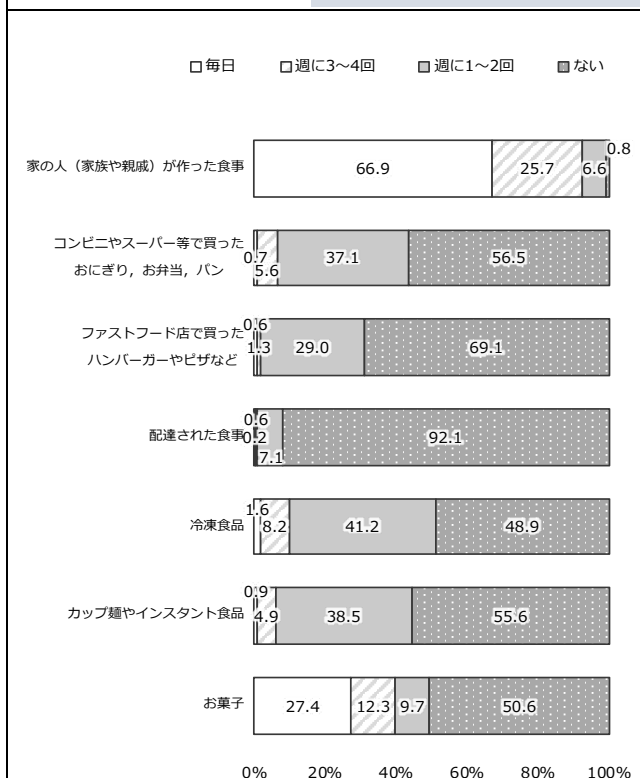


図 13 コロナ休校中の昼食内容 (男子)

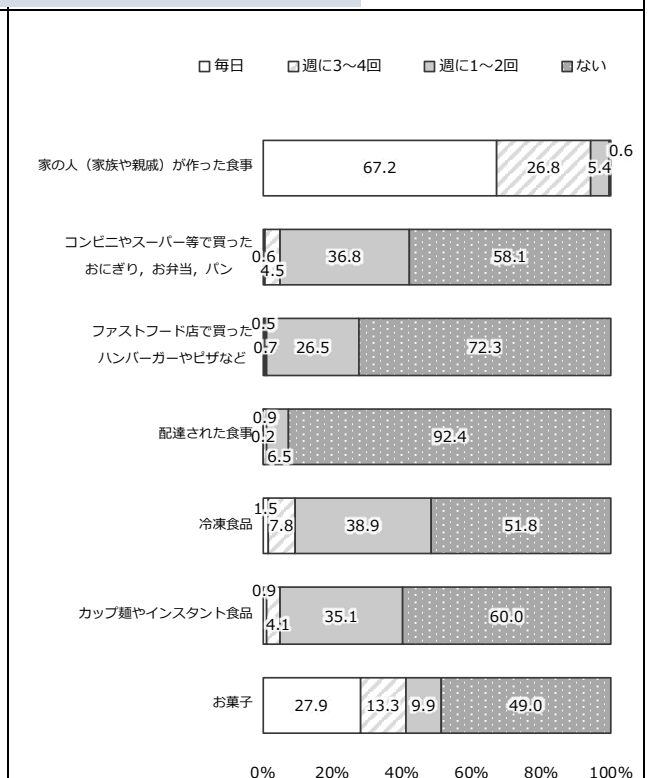


図 14 コロナ休校中の昼食内容 (女子)

休校中の昼食は家の人が作った食事が多かったといえる一方で、お菓子を食べていた者も少なくありませんでした。

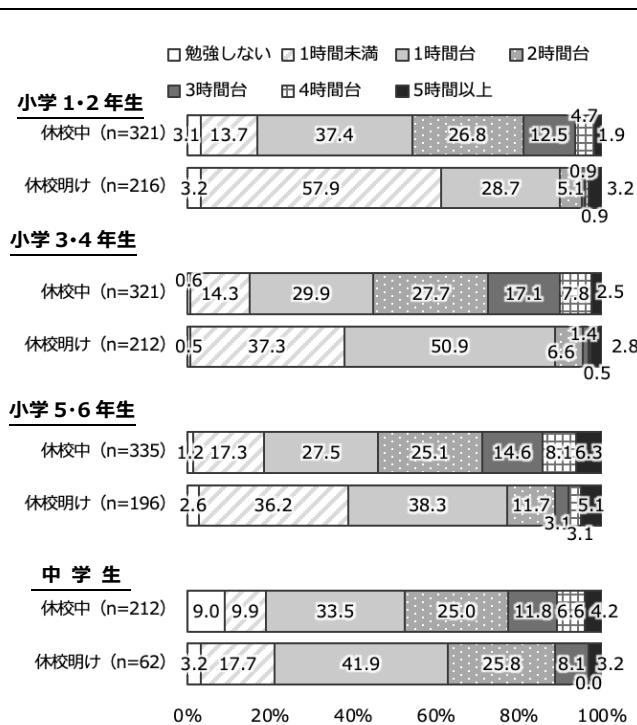


図 15 コロナ休校中と休校明けにおける自宅勉強時間（男子）

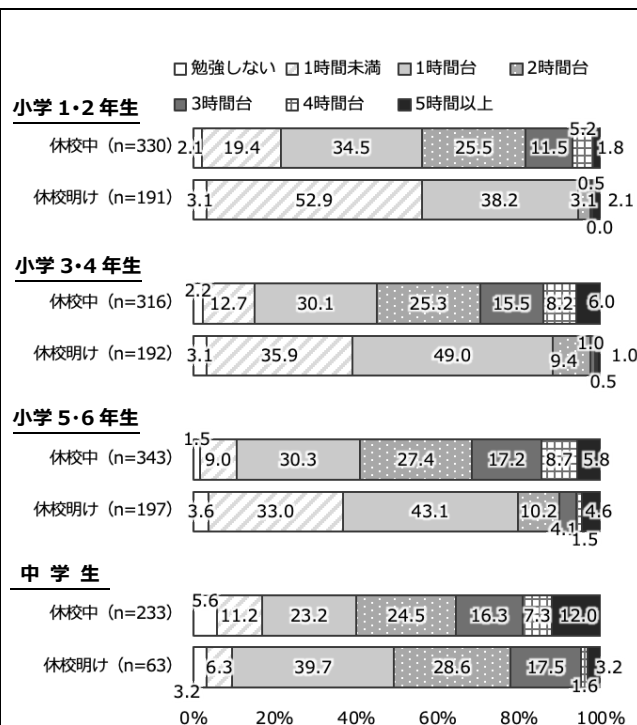


図 16 コロナ休校中と休校明けにおける自宅勉強時間（女子）

休校中は自宅勉強時間が増加しました。

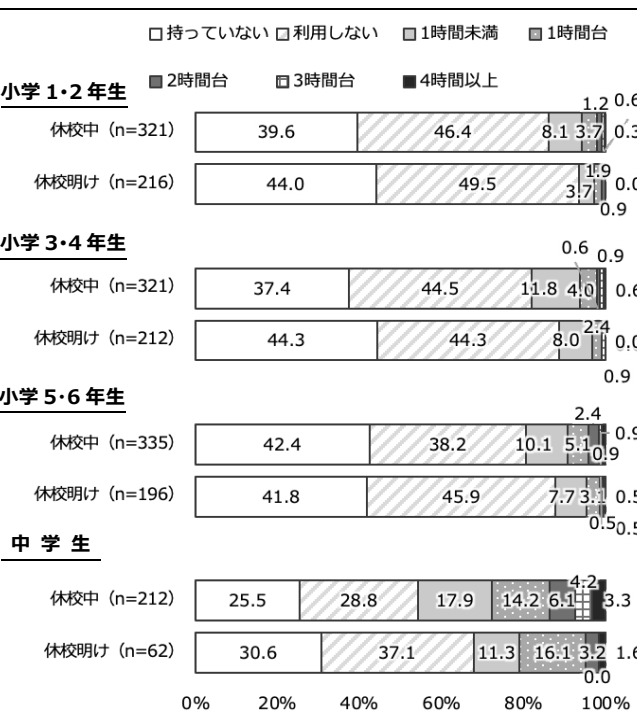


図 17 コロナ休校中と休校明けにおける自宅勉強時間（ケータイ・スマホ利用）（男子）

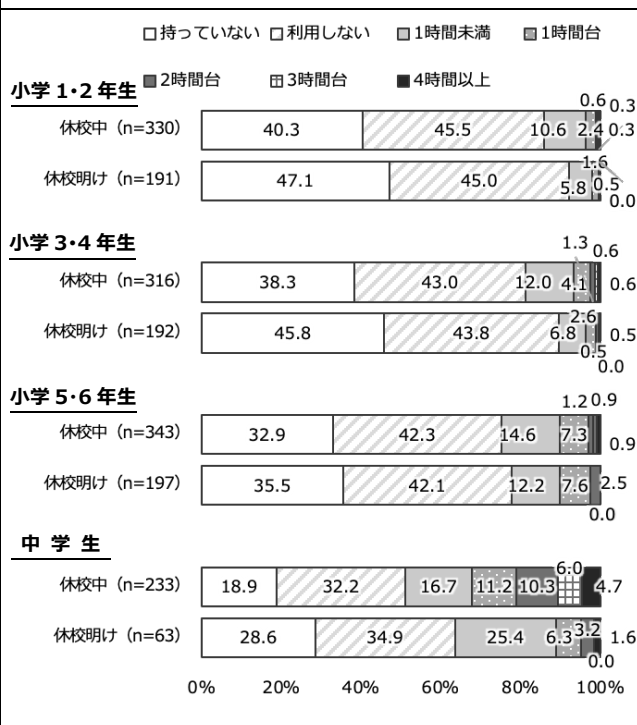


図 18 コロナ休校中と休校明けにおける自宅勉強時間（ケータイ・スマホ利用）（女子）

休校中は携帯・スマホでの自宅勉強時間も増加しました。

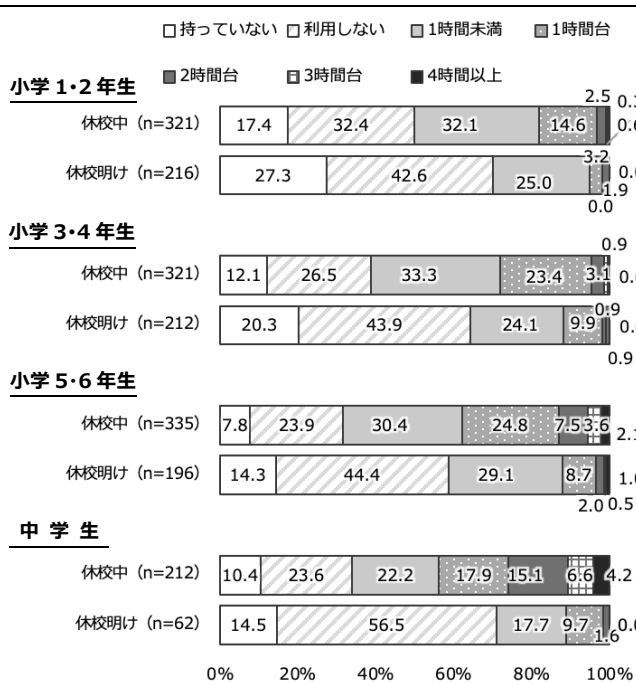


図 19 コロナ休校中と休校明けにおける自宅勉強時間
(タブレット・PC 利用) (男子)

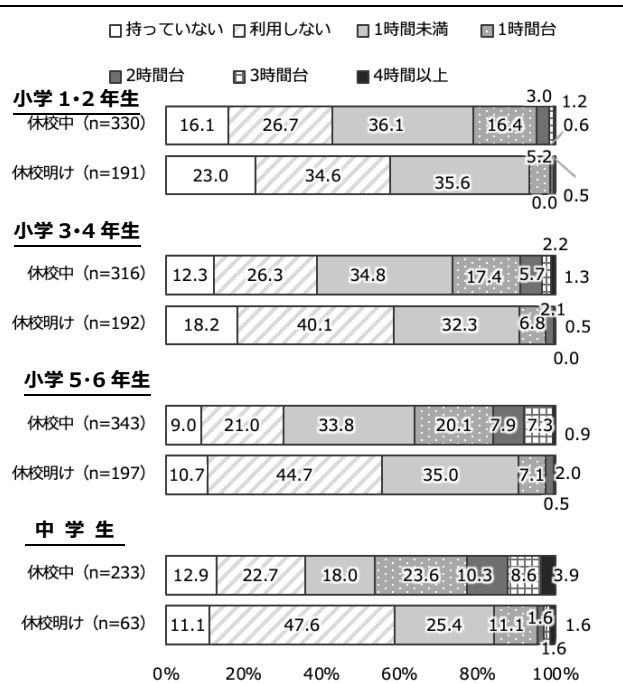


図 20 コロナ休校中と休校明けにおける自宅勉強時間
(タブレット・PC 利用) (女子)

休校中はタブレット・PCでの自宅勉強時間も増加しました。

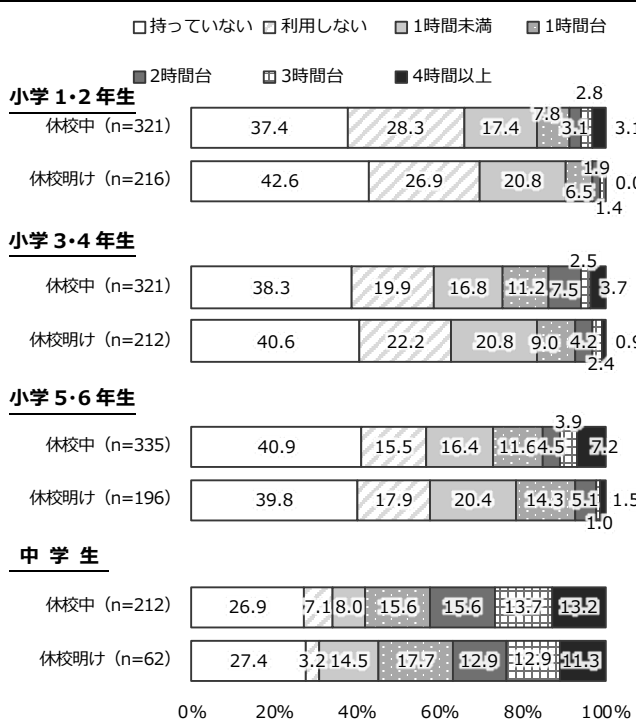


図 21 コロナ休校中と休校明けにおける
ケータイ・スマホ時間 (男子)

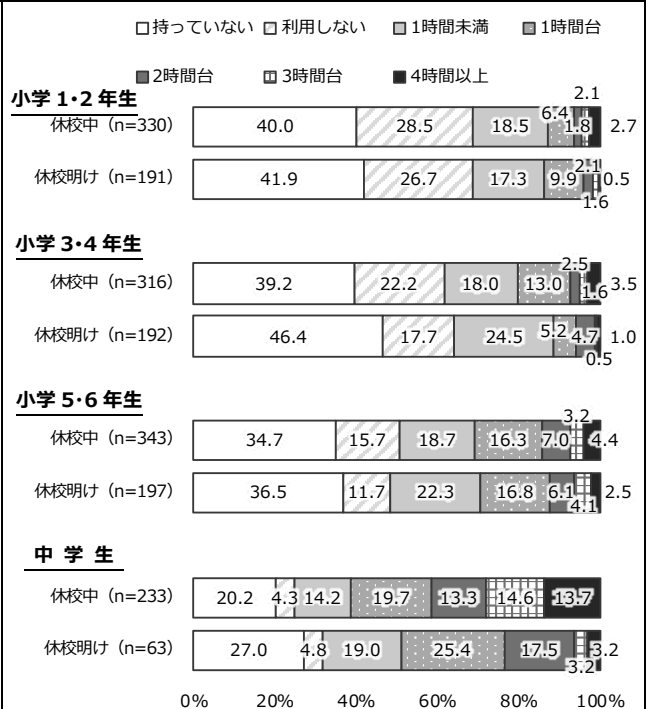
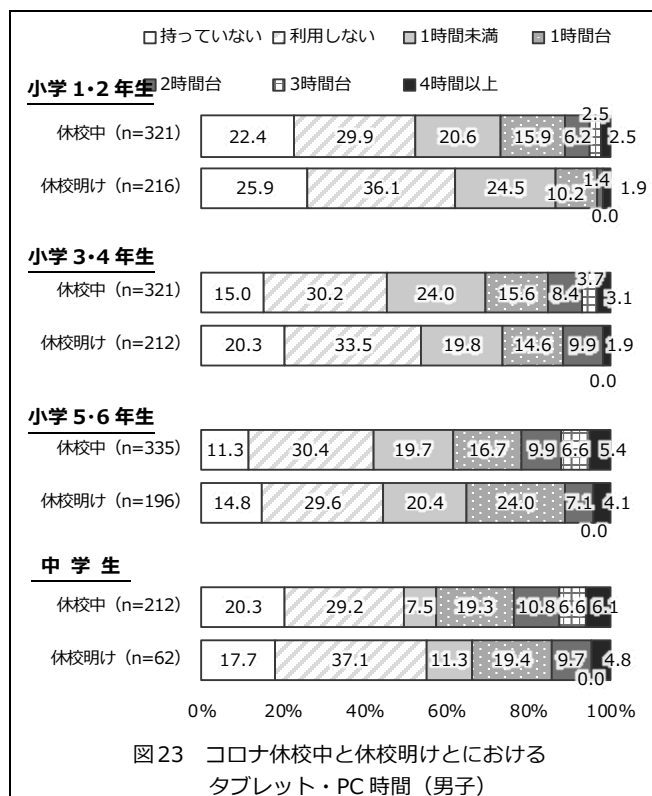
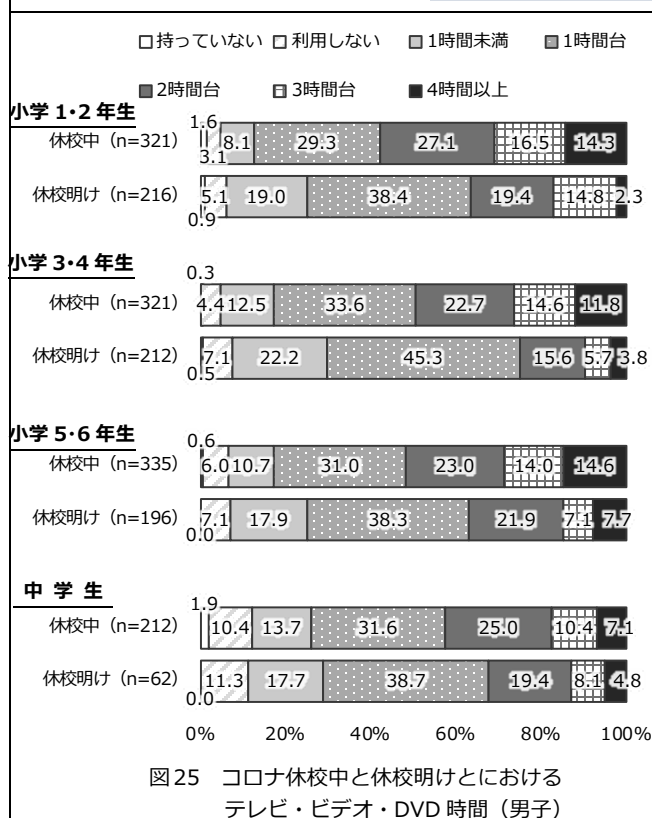
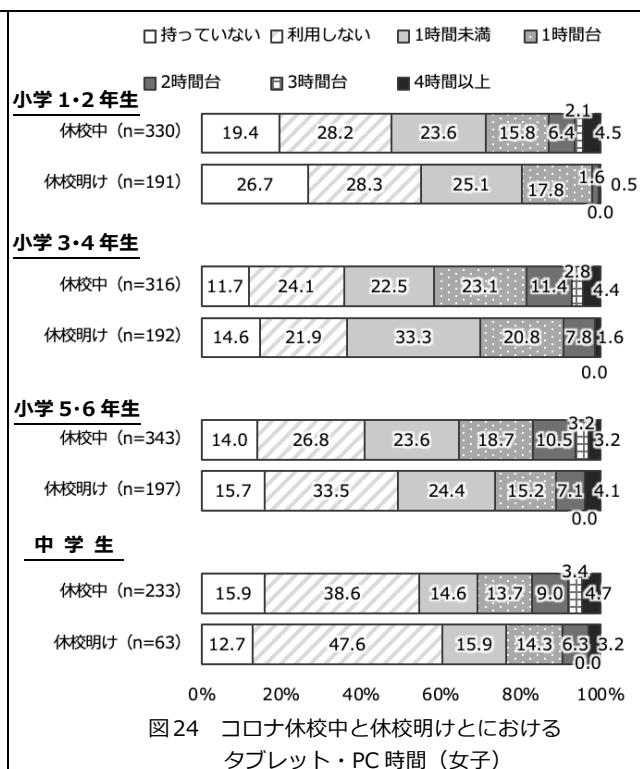


図 22 コロナ休校中と休校明けにおける
ケータイ・スマホ時間 (女子)

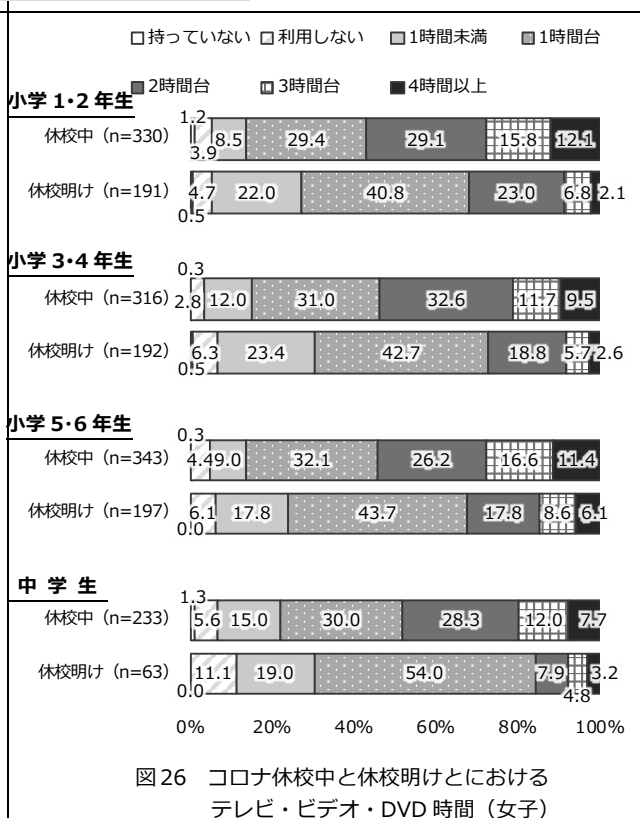
スマホ時間は休校中に幾分増えました。



休校中はタブレット・PC 時間も増加しました。



このことから、休校中はテレビ・ビデオ・DVD 時間も増加しました。



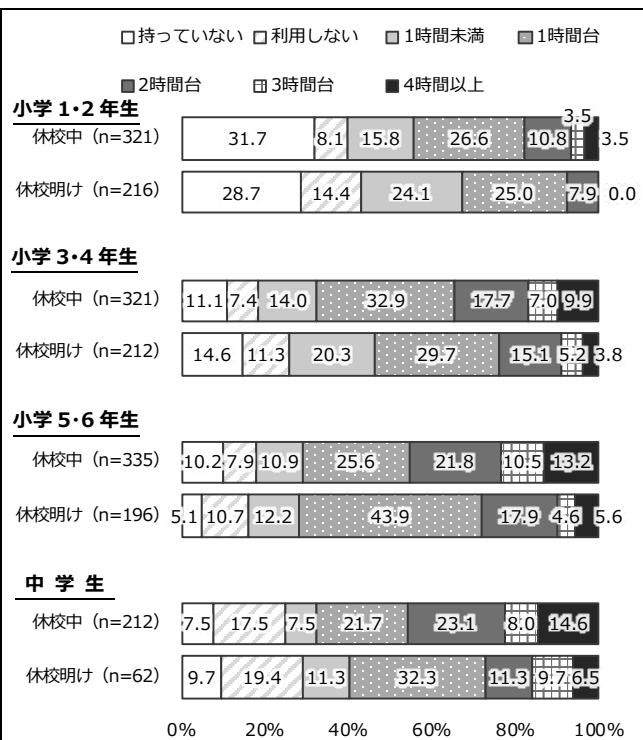


図 27 コロナ休校中と休校明けとにおけるゲーム時間（男子）

休校中はゲーム時間も増加しました。

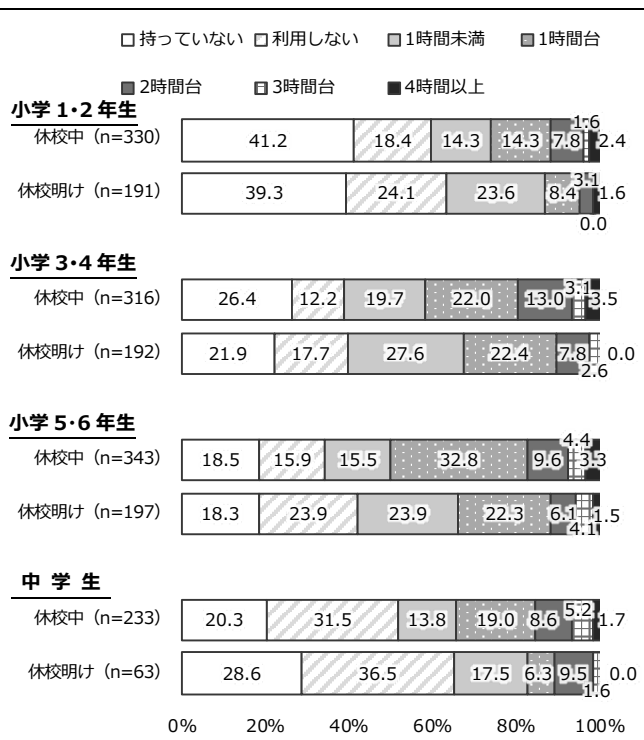


図 28 コロナ休校中と休校明けとにおけるゲーム時間（女子）

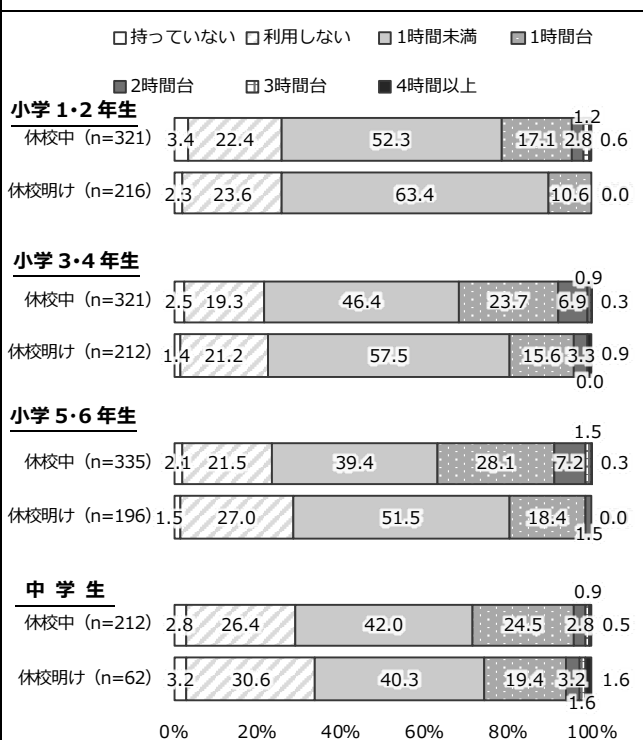


図 29 コロナ休校中と休校明けとにおける読書時間（男子）

休校中は読書時間も増加しました。

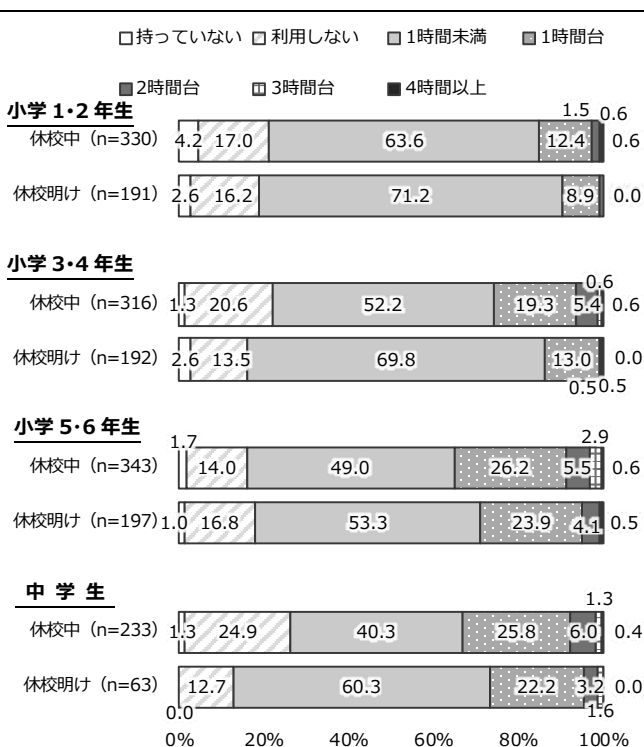
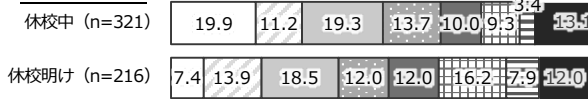


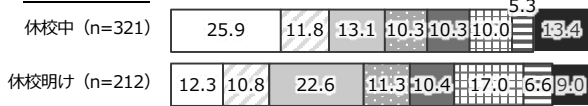
図 30 コロナ休校中と休校明けとにおける読書時間（女子）

□0日（なし） □1日 □2日 □3日 □4日 □5日 □6日 ■7日

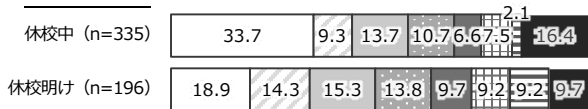
小学1・2年生



小学3・4年生



小学5・6年生



中学生

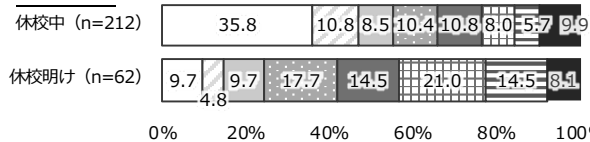
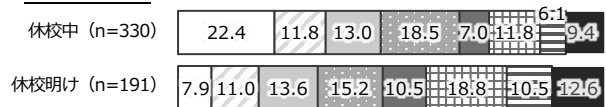


図 31 コロナ休校中と休校明けとにおける身体活動日数（男子）

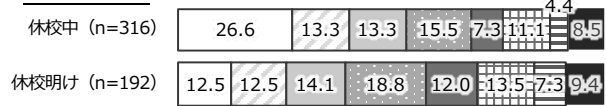
休校中の身体活動日数は0日（なし）だけでなく、7日（毎日）も増えました。
そのため、二極化傾向にあったといえます。

□0日（なし） □1日 □2日 □3日 □4日 □5日 □6日 ■7日

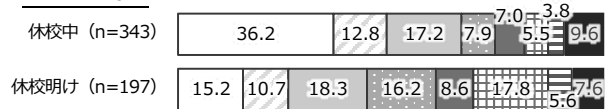
小学1・2年生



小学3・4年生



小学5・6年生



中学生

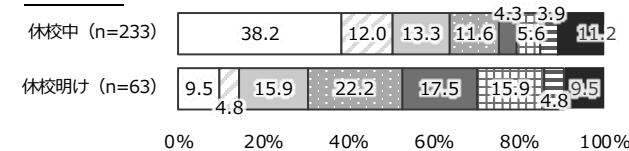
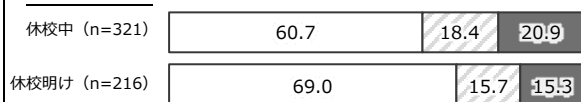


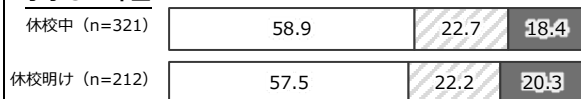
図 32 コロナ休校中と休校明けとにおける身体活動日数（女子）

□適応的使用 □不適応的使用 ■病的使用

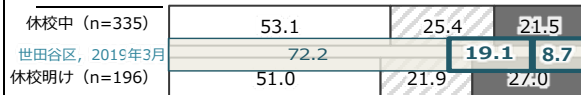
小学1・2年生



小学3・4年生



小学5・6年生



中学生

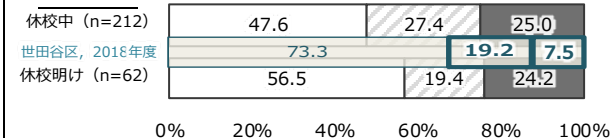
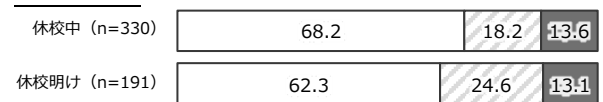


図 33 コロナ休校中と休校明けとにおけるネット依存傾向（男子）

□適応的使用 □不適応的使用 ■病的使用

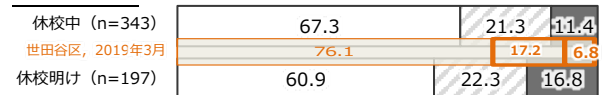
小学1・2年生



小学3・4年生



小学5・6年生



中学生

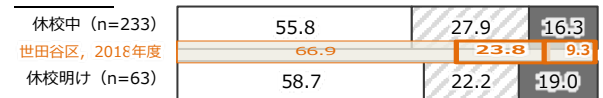


図 34 コロナ休校中と休校明けとにおけるネット依存傾向（女子）

ネット依存傾向の休校による変化はありませんでしたが、おおよそ1年前に行われた先行研究と比較すると増加していました。

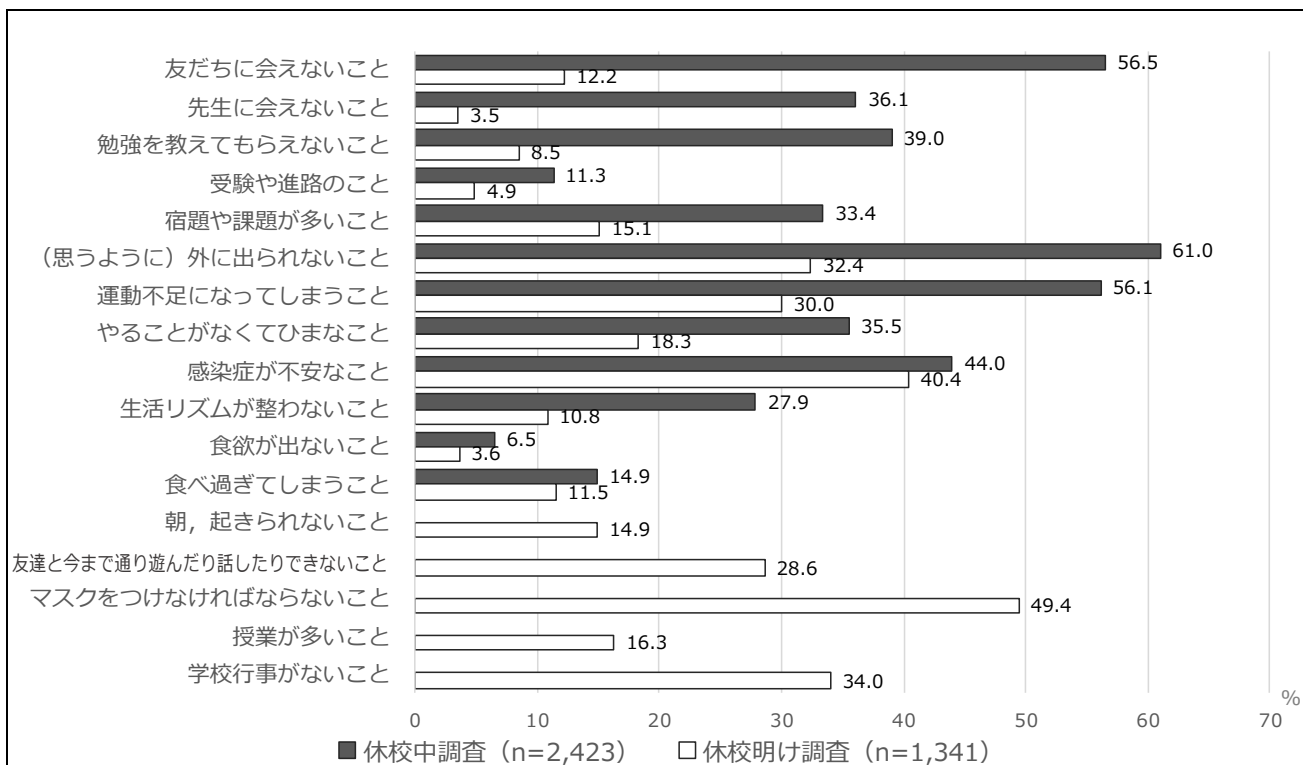


図 35 コロナ休校中と休校明けにおける子どもの困りごと

子どもの休校中の困りごとは、学校再開によりすべて減少しました。

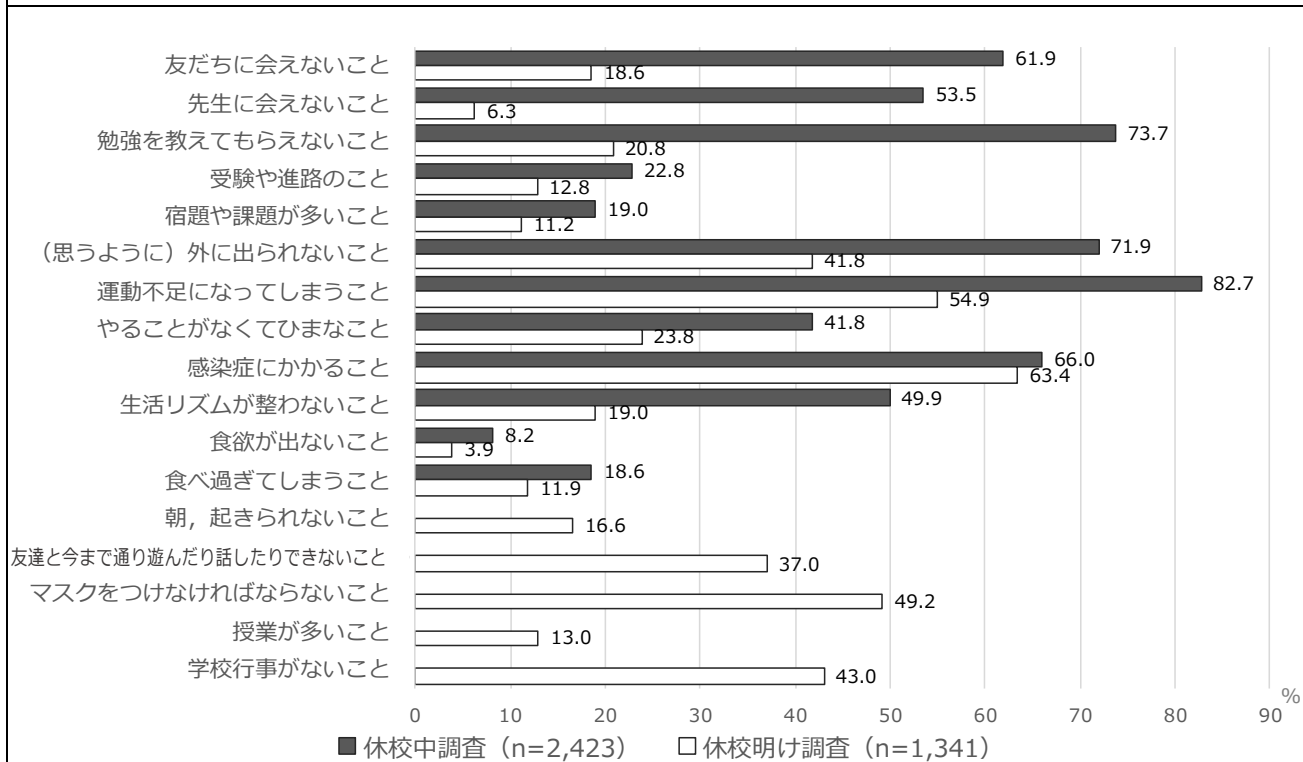


図 36 コロナ休校中と休校明けにおける保護者の心配ごと

休校中の保護者の心配ごととも、学校再開によりすべて減少しました。

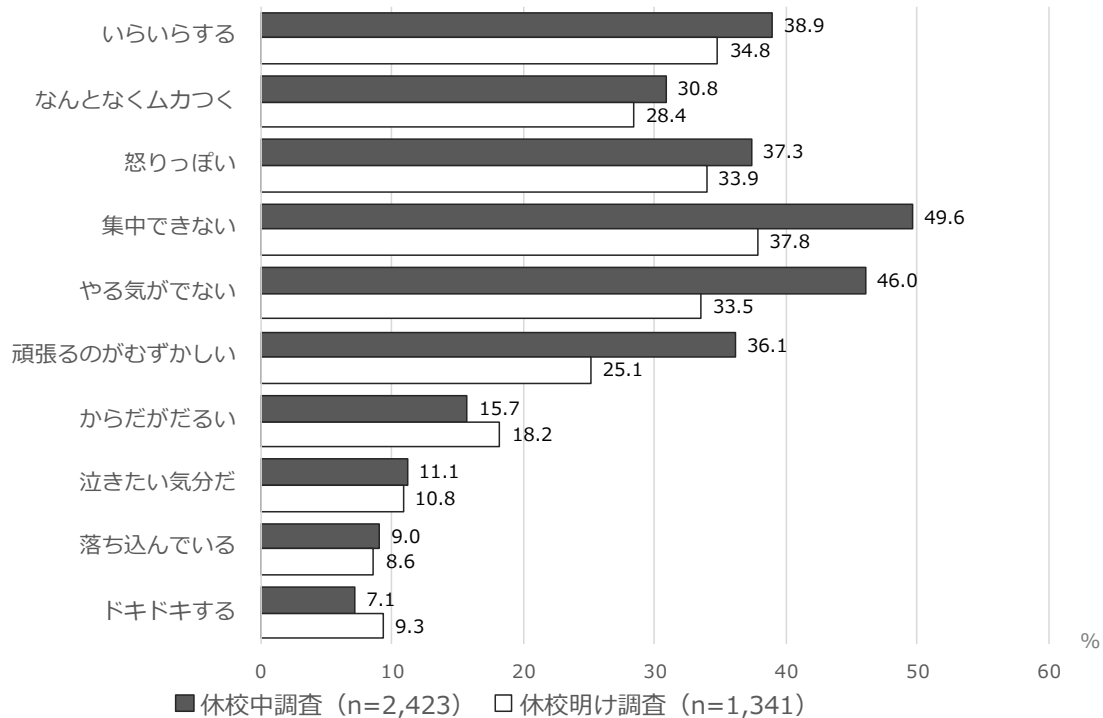


図 37 コロナ休校中と休校明けにおける子どもの精神症状

休校中の子どもの精神症状の訴えは、学校再開により多くの項目（8/10 項目）で減少しました。

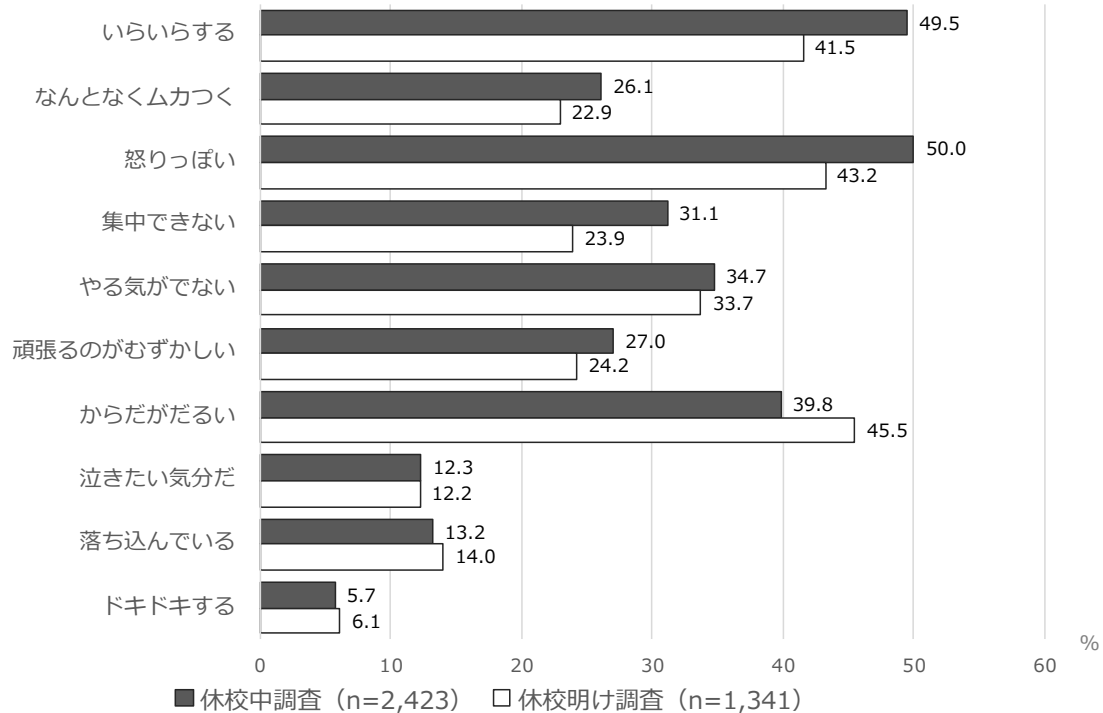


図 38 コロナ休校中と休校明けにおける保護者の精神症状

休校中の保護者の精神症状の訴えも、学校再開により多くの項目（7/10 項目）で減少しました。

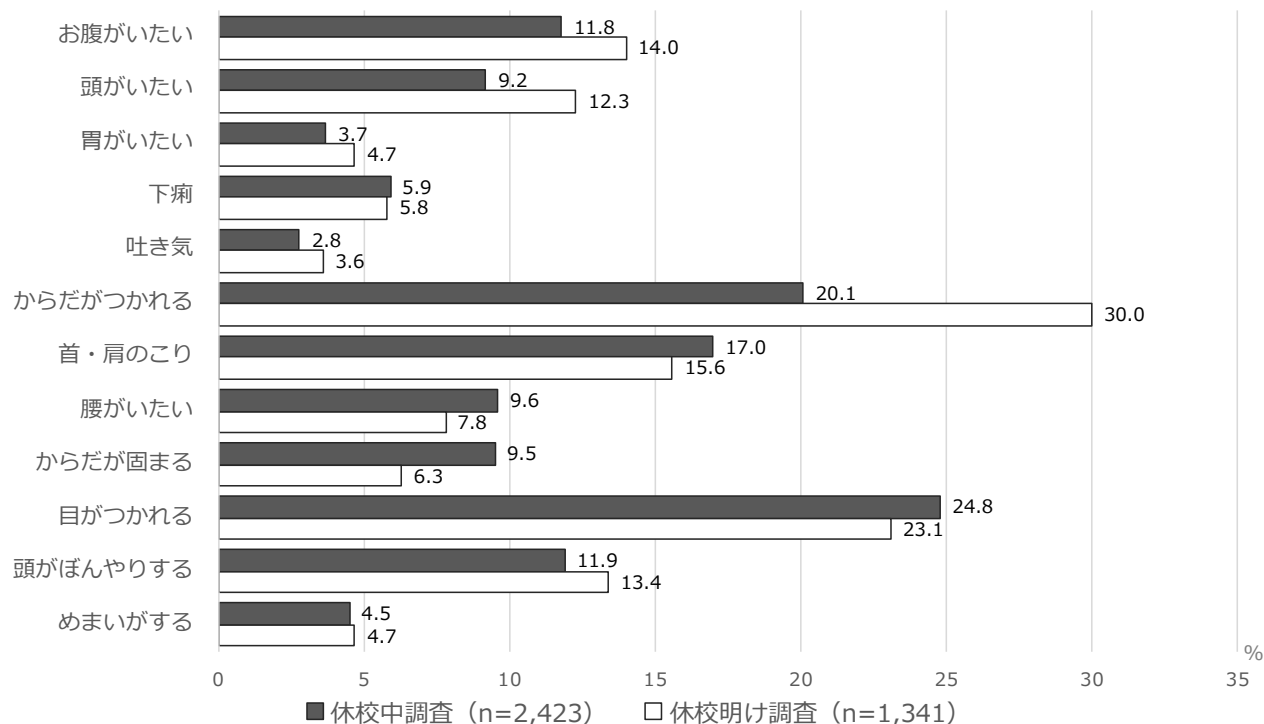


図 39 コロナ休校中と休校明けにおける子どもの身体症状

休校中の子どもの身体症状の訴えは、学校再開により多くの項目（7/12 項目）で増加しました。

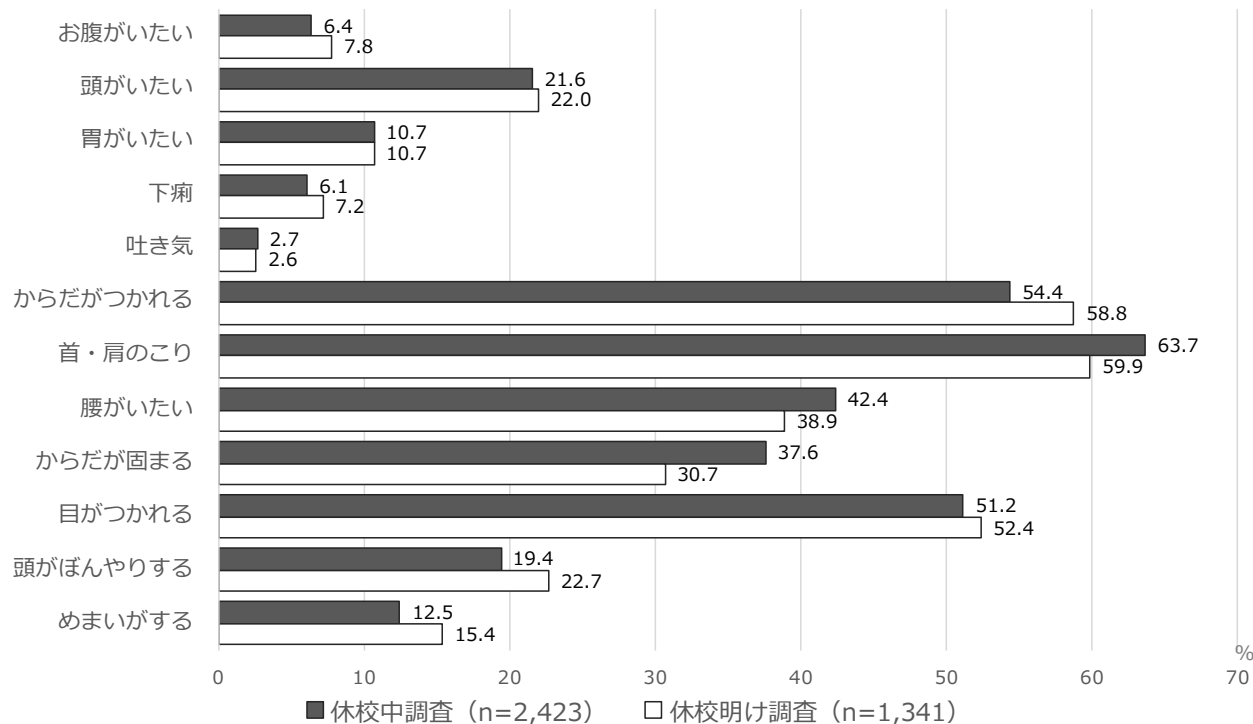
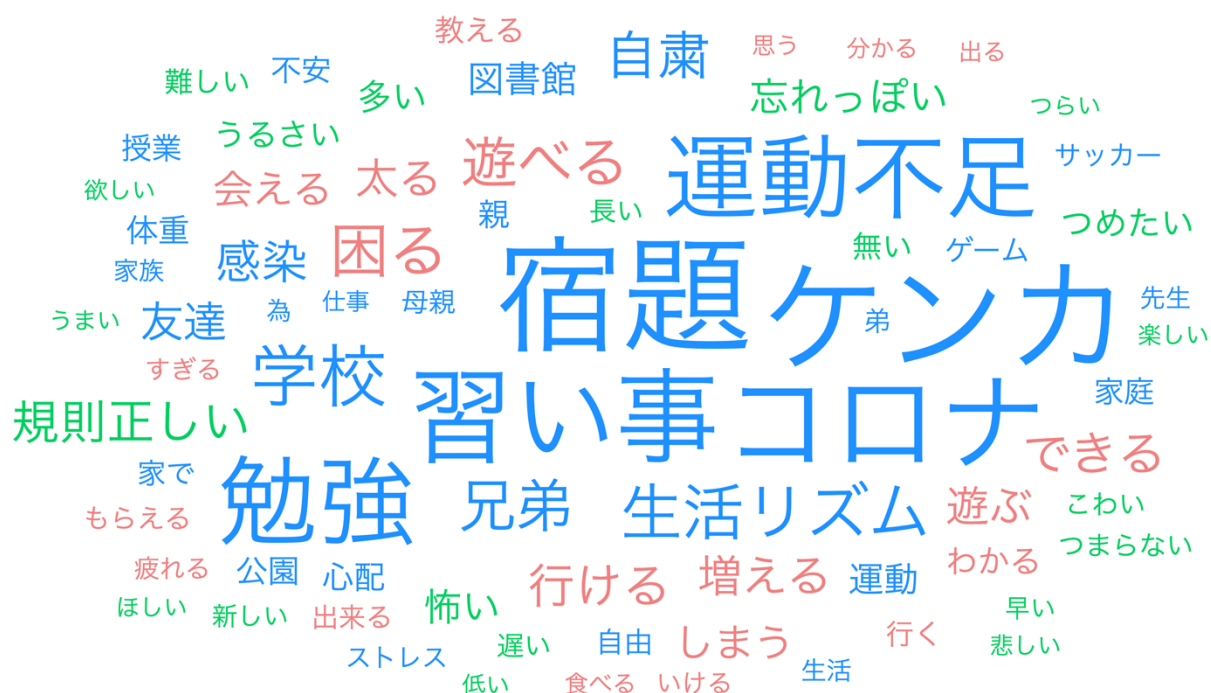
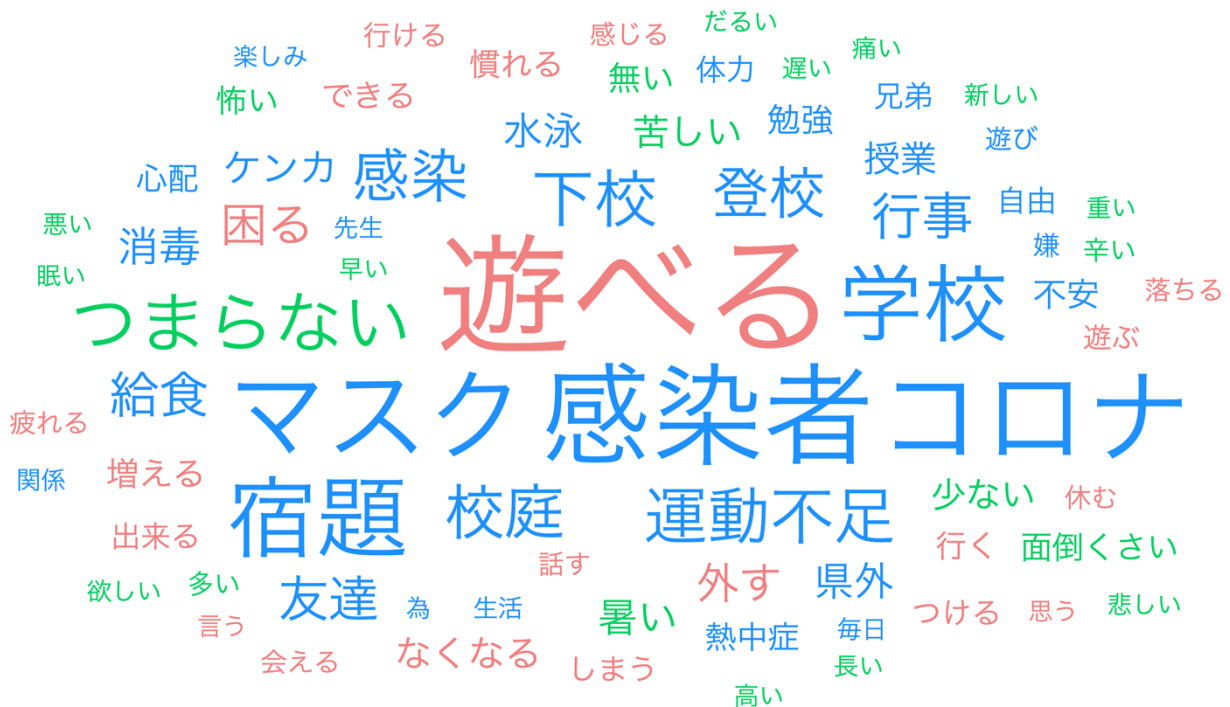


図 40 コロナ休校中と休校明けにおける保護者の身体症状

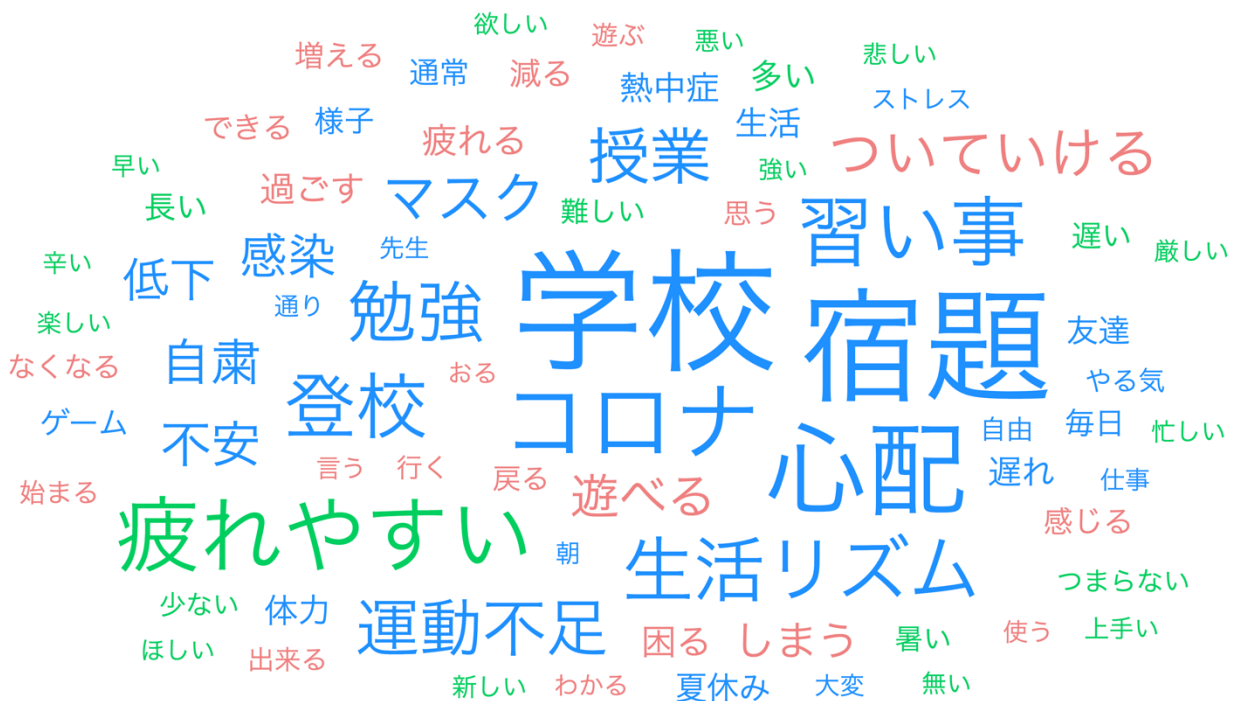
休校中の保護者の身体症状の訴えも、学校再開により多くの項目（7/12 項目）で増加しました。



休校中に困っていることを尋ねた子どもの自由記述では、「宿題」「ケンカ」「運動不足」が頻出しました。



休校明けに困っていることを尋ねた子どもの自由記述では、「遊べる」「マスク」「感染者」が頻出しました。



休校明けに困っていることを尋ねた保護者の自由記述では、「学校」「宿題」「疲れやすい」が頻出しました。

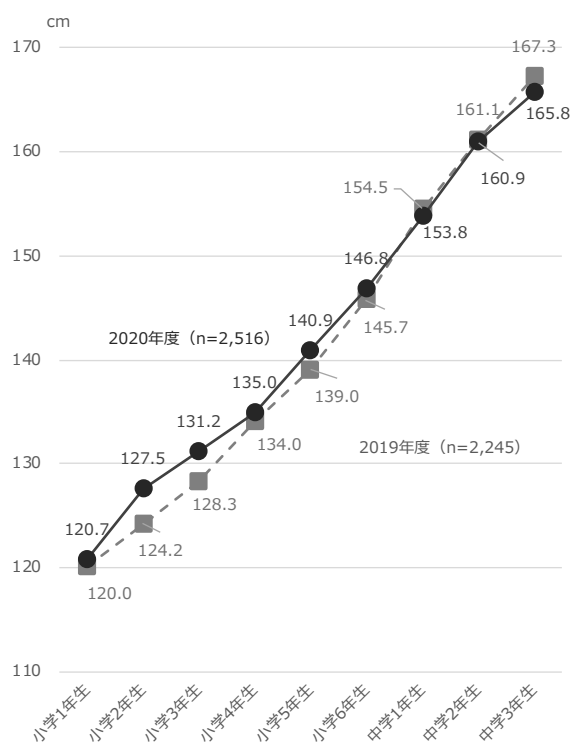


図 45 2019 年度と 2020 年度との身長の平均値の比較 (男子)

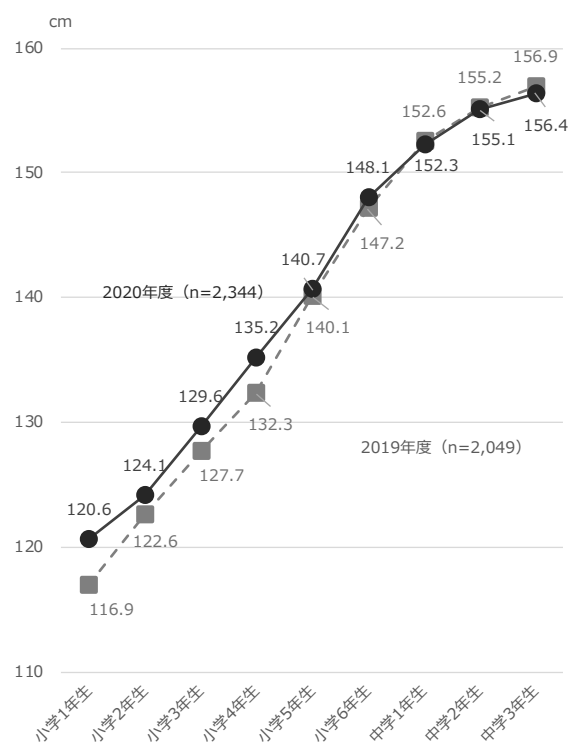


図 46 2019 年度と 2020 年度との身長の平均値の比較 (女子)

例年よりも健康診断の時期が遅い 2020 年度は小学生で高値、中学生で低値を示しました。

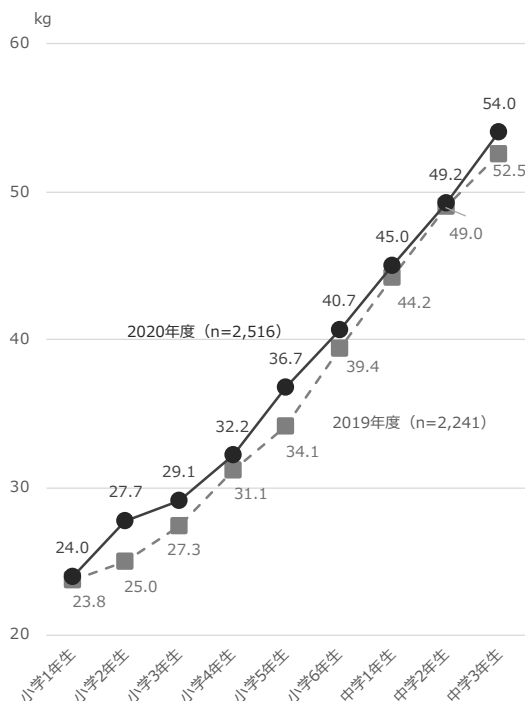


図 47 2019 年度と 2020 年度との体重の平均値の比較 (男子)

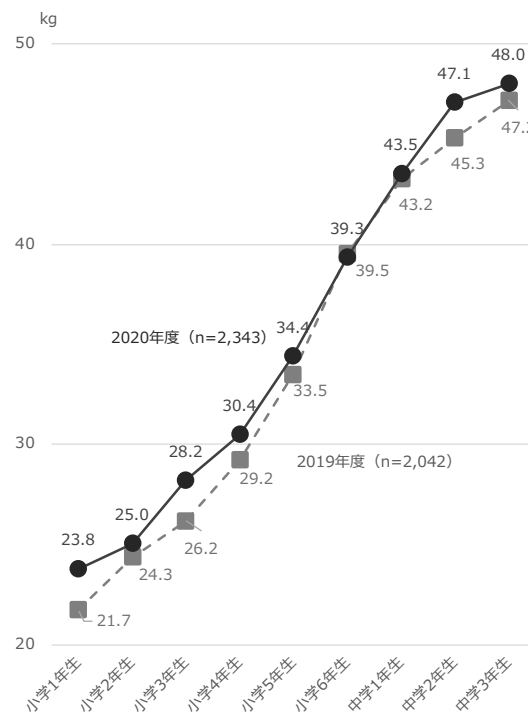


図 48 2019 年度と 2020 年度との体重の平均値の比較 (女子)

2020 年度は小中学生とともに高値を示しました。

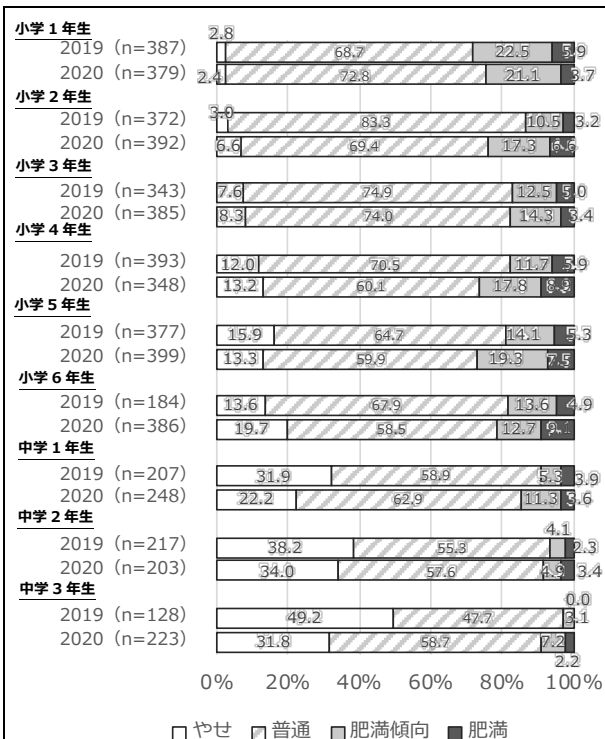


図 49 2019 年度と 2020 年度とのローレル指数の比較 (男子)

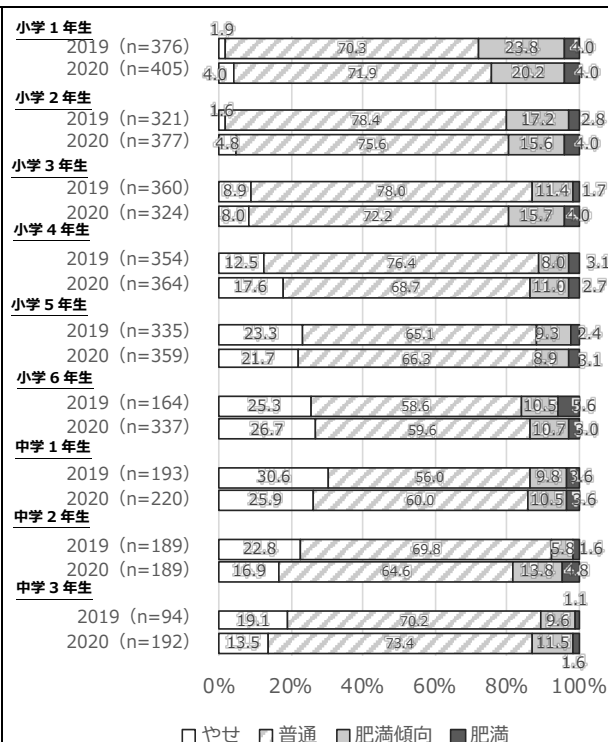


図 50 2019 年度と 2020 年度とのローレル指数の比較 (女子)

2020 年度は多くの学年 (男子 : 8/9 学年, 女子 : 6/9 学年) で「肥満傾向」+「肥満」の者が増加していました。加えて、小学生に限っては男女とも 4 学年で「やせ」に判定された者が増加していました。

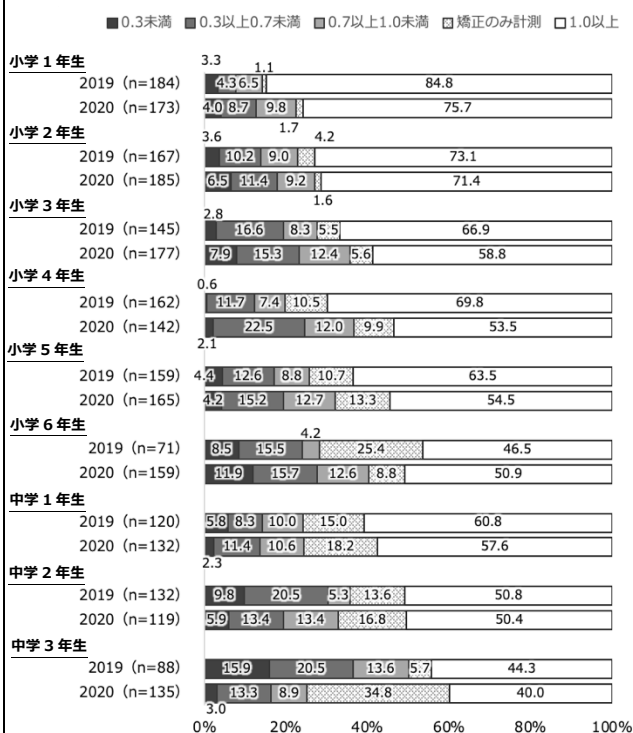


図 51 2019 年度と 2020 年度との視力の比較 (男子)

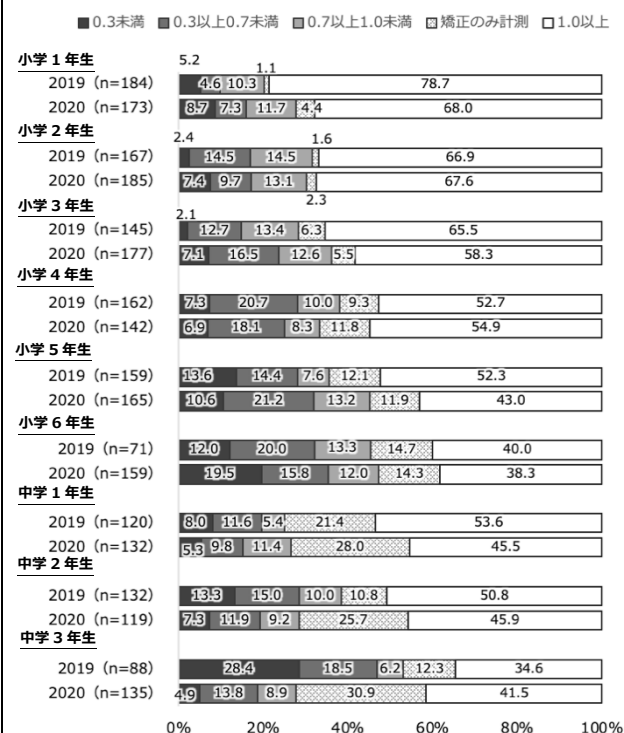


図 52 2019 年度と 2020 年度との視力の比較 (女子)

2020 年度は多くの学年 (男子 : 8/9 学年, 女子 : 6/9 学年) で 1.0 未満が増加していました。

以上の結果から、コロナ休校中の子どもたちは、**家族、きょうだいと自宅**で過ごし、**遅寝遅起きで寝つきが悪く、朝食欠食が増え、昼食にお菓子を**食べる者もあり、**勉強（オンライン含む）、スクリーンタイム、読書時間が増え、身体活動は二極化傾向**を示しました。また、**からだの不調**の訴えが減少する一方で、**心の不調、困りごと**の訴えが増加しました。同様に、保護者も**からだの不調**が減り、**心の不調、心配ごと**の訴えが増加しました。さらに、昨年度に比して、**ローレル指数、視力不良**が増加傾向にある様子も確認されました。

他方、休校による影響かは定かでないものの、**ネット依存傾向者**が1年前の調査と比べて、男子で**20%前後**、女子で**10%前後**も急増しました。その他、休校明けは**日中の眠気感、からだの不調**の訴えが増加する様子もみられました。

このように、コロナ禍という緊急事態下、子どもの**からだ**と**心**はますます窮地に追い込まれている様子を確認することができました。次ページ以降の資料（野井真吾ほか：速報！コロナ緊急調査—with コロナ, post コロナ時代の「育ち」と「学び」を考える！—（子どものからだと心・連絡会議 編）、『子どものからだと心白書 2020』、ブックハウス・エイチディ、2020、pp8-11）は、本調査の結果に基づいて with コロナ, post コロナ時代の育ちと学びを議論し、まとめたものです。併せてご参照いただければ幸いです。

2020 年 12 月 29 日

子どものからだと心・連絡会議
日本体育大学体育研究所

■この件に関するお問い合わせ先

子どものからだと心・連絡会議 事務局
〒158-8508 東京都世田谷区深沢 7-1-1
日本体育大学野井研究室気付
Tel & Fax:03-5706-1543
Mail:renrakukaigi@kodomonokaradatokokoro.com



速報！ コロナ緊急調査

— withコロナ、postコロナ時代の「育ち」と「学び」を考える！

コロナ緊急調査WG（野井真吾・日本体育大学教授、鹿野晶子・日本体育大学准教授、田村史江・日本体育大学大学院博士前期課程大学院生、榎本夏子・日本体育大学大学院博士後期課程大学院生、田中 良・日本体育大学助教、中島綾子・文教大学付属小学校養護教諭、下里彩香・港区立東町小学校養護教諭、吉永真理・昭和薬科大学教授）

はじめに

新型コロナウイルス感染症のパンデミック（世界的大流行）は、世界中の人々の生活を否応なしに一変させました。とうぜん、日本の子どもたちも例外ではありません。日本では、2月27日、首相の独断で全国の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等の臨時休校が要請されました。この日を境に、子どもたちは突然学校に行けなくなり、大好きな友達や先生と会えなくなってしまいました。年度末の時期とも重なったことから気持ちの整理ができないうちに、新年度を迎えなければならない状況にもなっていました。一時は、「緊急事態宣言」も発出されて不要不急の外出禁止が要請され、子どもたちの居場所や行動はますます制限されることになってしまいま

した。さらに、ようやく登校が再開された現在も、かつてとはまったく異なる学校生活を余儀なくされています。正に、緊急事態です。もちろん、このような事態は日本の子どもたちだけのものではありません。4月8日、国連子どもの権利委員会は、パンデミックが子どもに及ぼす重大な身体的、感情的、心理的影響を警告し、「子どもの権利」を保護するよう各国に要請しています。

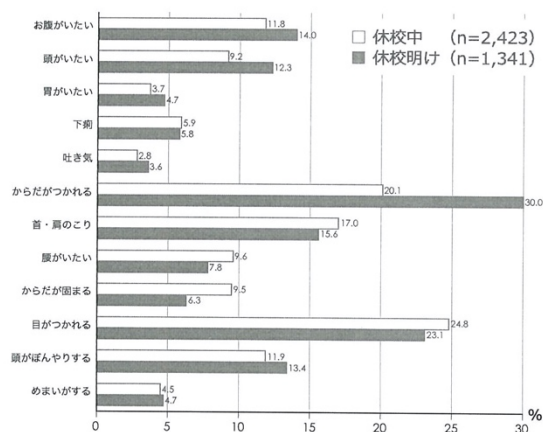
このような状況を踏まえて、「子どものからだと心・連絡会議」と「日本体育大学体育研究所」は、突然の臨時休校が子どもの「からだと心」に及ぼす影響の緊急調査を実施することにしました。まずは、子どもが置かれている現実を知る必要があると思ったからです。そこで本稿では、その緊急調査の結果を基に、withコロナ、postコロナ時代の

子どもの「育ち」と「学び」について考えてみたいと思います。

緊急調査の方法

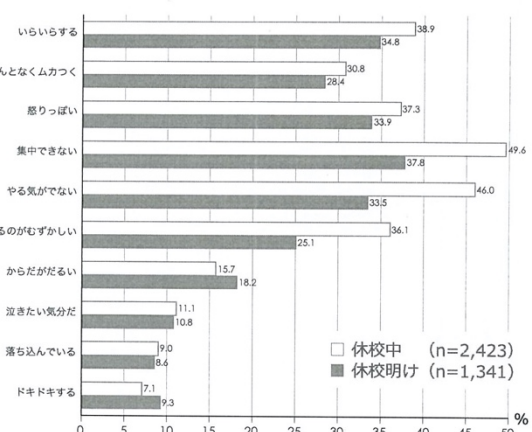
緊急調査に際して最初に議論したことは、調査方法についてでした。休校中であることから、いつものように先生方を通じて質問紙を配布、回収することができません。加えて、目に見えないウイルスへの警戒から、質問紙を介した感染も心配です。そのため、今回の緊急調査では調査校からURLとQRコードを各家庭にメール配信したうえで、調査フォームに直接アクセスして回答を寄せてもらうことにしました。

その結果、急な呼びかけであったにもかかわらず、5月の休校中調査には、埼玉、東京、神奈川、静岡の公立小学校、中学校が31校も参加してくれ、2,423組の小中学生とその保護者の声を集めることができました。その後、およそ3カ月間に及んだ休校措置が解かれて、多くの地域で学校が再開されたのは5月下旬のことでした。分散登校からはじまり、次第にいつもの日常を取り戻すのかと思いきや、そうともいわずに窮屈な学



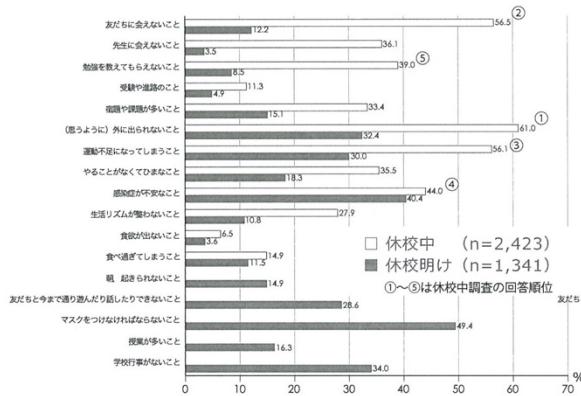
▲図1：からだの状態の訴え率

注：「よくあてはまる」と「あてはまる」の回答の合算

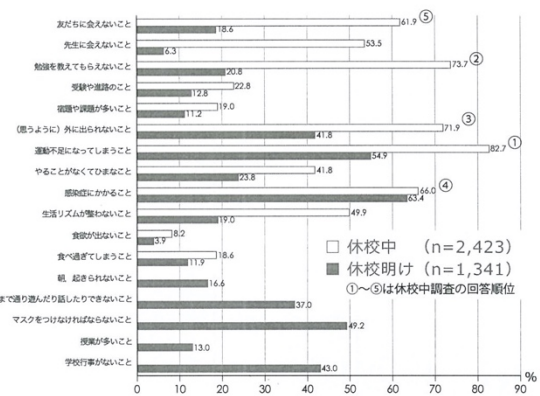


▲図2：心の状態の訴え率

注：「よくあてはまる」と「あてはまる」の回答の合算



▲図3：子どもが困っていること（困り事）



▲図4：保護者が心配なこと（心配事）

校生活が強いられるなか、休校明け調査が行われたのは6・7月のことでした。この調査にも、1,341組の小中学生と保護者が回答してくれました。

休校中は生活リズムが乱れる！

そもそも、休日は大人であっても生活リズムが乱れがちです。そこで、学年段階別にみた就床時刻、起床時刻の分布を集計してみました（P.140）。すると、いずれの学年段階においても、休校中に比べて休校明けの分布が早い時間に移行している様子を確認することができました。

また、同ページ（P.140）には、睡眠問題の回答率が掲載されています。ここでは、「朝起きられない」も、「寝つきが悪い」も、「夜中に目が覚めやすい」も、やはりすべての学年段階で休校中に比べて休校明けの訴えが減少したのです。

このような結果から、休校中は生活リズムが後ろ倒しになり、睡眠問題が生じられる様子がわかりました。

休校中はストレスが増し、学校が再開されるとからだが悲鳴をあげる！

また、今回の緊急調査では、突然の休校が「からだ」と心に及ぼす影響が多方面で心配されていたことから、それらについても尋ねました。結果は、図1、

図2のとおりです。

ご覧のように、からだの状態では12項目中7項目（お腹がいたい、頭がいたい、胃がいたい、吐き気、からだがつかれる、頭がぼんやりする、めまいがする）で休校中よりも休校明けで高い訴え率を示しました。また、スクリーンタイムの増加を心配させる「目がつかれる」が、休校中（24.8%）も、休校明け（23.1%）も高値を示す結果も気になりました。対して、心の状態では、10項目中8項目（いらいらする、なんとなくムカつく、怒りっぽい、集中できない、やる気がでない、頑張るのがむずかしい、泣きたい気分だ、落ち込んでいる）で休校明けよりも休校中が高い訴え率を示しました。

これらの結果から、休校中はストレスが増して、休校明けはからだの悲鳴をあげていることがわかりました。

休校中は子どもの困り事、親の心配事が増す！

さらに、子どもたちの困り事についても尋ねてみました（図3）。それによると、同一項目で比較できるすべての項目（12項目）で、休校中に比べて休校明けの困り事が減少している様子を確認することができました。このような結果は、保護者の心配事（図4）でも同じでした。

ただ、休校中調査における子どもの困り事と保護者の心配事の上位5項目

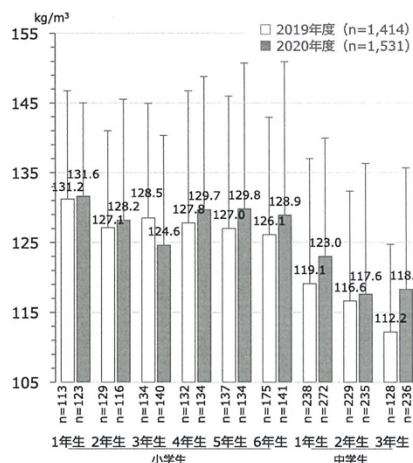
を見比べてみると、「（思うように）外に出られないこと」と「運動不足になってしまうこと」、ならびに「友だちに会えないこと」と「勉強を教えてもらえないこと」の順位が入れ替わっている様子も窺えました。このような結果は、大人の認識とは異なる子どもからみた学校の存在意義を教えてくれているようにも思います。

長期自粛生活で肥満、視力不良が増加……？

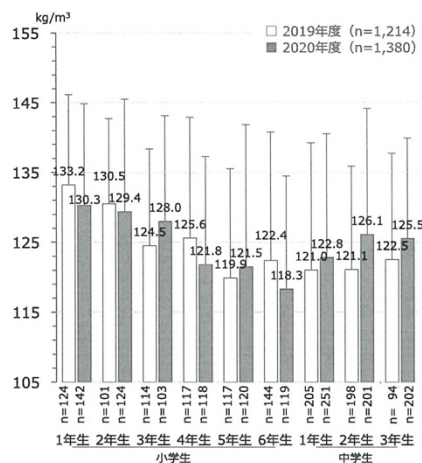
他方、健康診断の結果にも変化がありそうです。図5、6には、学校健康診断の結果を基に、同校における昨年度（2019年度）と今年度（2020年度）のローレル指数を、図7、8には同じく裸眼視力1.0未満の者の割合を示しました。

これらの図が示すように、身長、体重から算出したローレル指数は、女子でこそ9学年中5学年（小学3、5、中学1、2、3年生）で増加している程度でしたが、男子では小学3年生を除く学年で軒並み増加している様子が確認されました。どうやら、長期自粛生活による身体活動量の低下は、特に、男子でその影響を大きく受けると言えそうです。

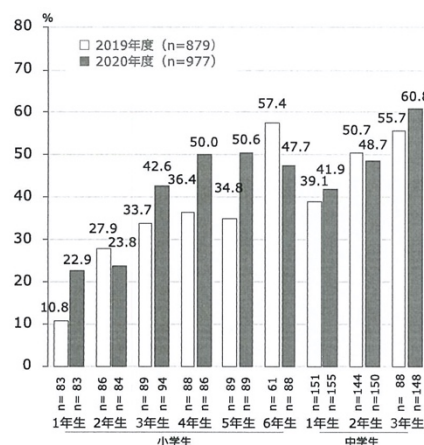
一方、裸眼視力1.0未満の者の割合については、9学年中男子が6学年（小学1、3、4、5、中学1、3年生）で、女子が5学年（小学1、2、5、中学1、



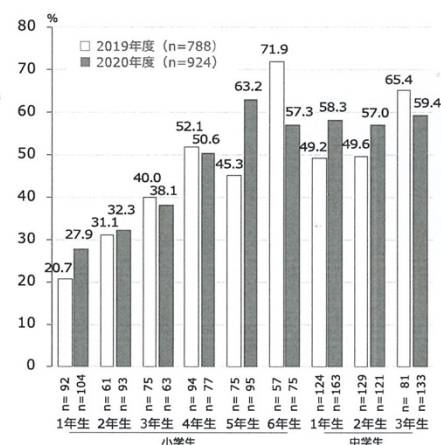
▲図5：ローレル指数（男子）



▲図6：ローレル指数（女子）



▲図7：裸眼視力1.0未満の者の割合（男子）
注：矯正視力のみ測定者の割合も加算



▲図8：裸眼視力1.0未満の者の割合（女子）
注：矯正視力のみ測定者の割合も加算

2年生）で増加している様子が示されました。

周知のとおり、今年度はいつもと同じ時期に学校健康診断を実施することができませんでした。また、これらの結果は、2019年度と2020年度の対象者が異なりますし、そもそも有意な差なのか否かについても検討が必要です。そのため、結果の解釈は慎重であるべきですが、それでも心配な結果であるように思うのです。このようなことから、現在も

これらのデータ収集に努めています。併せて、体力・運動能力のデータ収集にも努めています。

精神的な「密」を！

以上のように、コロナ禍という未曾有の事態に子どもの「からだ」と「心」が大きなダメージを受けたのは確かと言えます。また、休校明けは学校再開を待ち望んでいた子どもたちの気持ちが満たされて、生活リズムが整い、困り感も少

なくなった反面、およそ3カ月ぶりの学校生活にからだが適応しきれていない様子を教えてくれています。

ところが、このような現状において、学習の遅れを心配する報道があまりに多いのも気になります。もちろん、今回の休校により遅れた学習を保障することは大切なことです。ただ、学校再開に伴って7時間目や土曜日の授業が実施されていたり、学校行事が中止されたり、夏休みが大幅に短縮されたり、休み時間や給食でのおしゃべりが禁止されていたりといったことを耳にすると、学校再開後に身体的な不調を抱えている子どもたち、あるいは、減少したとはいえ、不安な気持ちを抱えている子どもたちをさらに追い込んでしまうことにならないかが心配です。まずは、子どもの「からだ」と「心」に寄り添うことが大切なのではないでしょうか。そしてそのためには、少人数学級の早期実現や養護教諭の複数配置、教員の加配等こそが真に必要な対策と言えないでしょうか。

もとより、昨年（2019年）3月に国連子どもの権利委員会によって示された「日本政府第4・5回都合報告書に関する最終所見」（CRC/C/JPN/CO/4-5）

では、そのパラグラフ20 (a)において「社会の競争的な性格により子ども時代と発達が悪化することなく、子どもが子ども時代を享受することを確保するための措置を取る」と勧告されています。これが日本の現状です。100年に1度の緊急事態下にある現在、それほどまでに学習の遅れに固執する必要があるのかさえ疑問に思えてきます。

また、そもそも、子どもは群れて育つものです。換言すると、「3密（密閉、密集、密接）」が子どもを育ててきたとも言えます。そのため、withコロナ時代の日常においては、身体的な「3密」を回避しつつ、子どもの声に耳を傾けてそれに寄り添い精神的な「密」をどのようにつくり出していくかが当面の課題として問われています。いまこそ、運動会や学芸会等の学校行事をどうするか、休み時間や部活動のあり方をどうしたらよいか等々といったことを子どもたちと一緒に考えてみてはどうでしょうか。

高校生の声に端を発した9月入学の議論でしたが、彼ら、彼女らの真の主張は「9月に入学したい」ということではなく、「当たり前前の学校生活を送りたい」、「子ども時代を送りたい」ということでした。このような主張は、上記「最終所見」の勧告とも共通しており、至極当然の立派な意見表明であったと思います。にもかかわらず、大人たちはその主張を制度改正の議論にすり替えてしまいました。これでは、同「最終所見」のパラグラフ22「(略) 子どもの意見が適切に重視されることを確保するよう締約国に要請する。本委員会は、さらに、聞かれる権利を子どもが行使することを可能とする環境を提供すること、(略) 参加を積極的に促進すること」との勧告とも逆行して、ますます子どもたちが口を閉ざしてしまうことにならないかが心配です。

子どもが求める真の「育ち」と「学び」！

周知のとおり、「education」の語源はラ

テン語の“educere”にあります。“educere”の「e」は外へ、「ducere」は引き出すという意味です。つまり、“education”とは、それぞれ子どもたちがもっている能力を外へ引き出すことを意味します。子どもたちの能力をどう引き出すかを考えれば、勉強を詰め込むことにはならないはずで、実際、通常の「教育」ができなかった休校中も、子どもたちはいろいろなことを学んでいたはずで、普段はできないお菓子づくりに挑戦してみたことも、気分転換に出かけた散歩で草木の名前を覚えたことも、学校がないと生活リズムが乱れてしまうことに気づいたことも大事な学びです。子どもの声に耳を傾けてそれに寄り添い、無意識のうちに学んだことを意識化することで真の学び、真の“education”につながると思うのです。

2016年1月22日に閣議決定された第5期科学技術基本計画では、わが国が目指すべき未来社会の姿として、狩猟社会（Society 1.0）、農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）、情報社会（Society 4.0）に続く「超スマート社会」、いわゆる「Society 5.0」の構想が提唱されています。このような社会変革が子どもの「学び」を変化させることは想像に難くありません。2018年6月、文科省が「学校ver.3.0」と称される新時代の学びの方向性として、「個別最適化された学び」、「基礎的読解力、数学的思考力などの基盤的な学力や情報活用能力の習得」、「文理分断からの脱却」を示すに至ったのはそのためです。

ただ、たとえば、「個別最適化された学び」というと聞こえはいいかもしれませんが、要は、目の前のPCに提示された問題を解いて、それに正解したら次はこの問い、このように間違えたら次はこの問い、こう間違えたらその人の次の問いはこれ、というようなものです。そう考えると、長期間に亘った今回の休校では、「学校Ver.3.0」に向けてのパイロット研究が行われていたとも言えます。今回の結果とそこで見てきた課題を

踏まえて、今後は「個別最適化学習」に向けて、一気にこの改革が加速することも予想できます。実際、文科省は、これまで2023年度までとしていた1人1台のPC整備を前倒しして、今年度中にその実現を目指すとしています。4月7日のことです。

翻って、ヒトは動物です。動物は“動く物”と書くように、元来動かなければヒトにも人間にもなれません。私たち人類が森から草原に飛び出し、外界の敵から身を守りながら獲物を探していた時代は、1日に10～15kmは移動していたと言います。また、ヒトは一人では進化してきたわけではありません。家族や仲間と協力、共存しながら進化してきました。そのことは、Society 5.0（超スマート社会）が到来しても同じです。むしろ、そのような社会になればなるほど、そのことを強く自覚しておく必要があると思います。

裏を返すと、不要不急の外出自粛を要請され、友だちと会うことさえ制限された長期休校は、子どもに課せられた想像できないほどの試練であったと思います。と同時に、休校中調査において、「(思うように) 外に出られないこと」「友だちに会えないこと」に困っているとの子どもの声は、私たちが人間であること、ヒトであること、動物であることを敏感かつ本能的に感じて、私たちに教えてくれているようにも思うのです。

ともあれ、まずは緊急調査の結果が示す子どもたちの現実を直視することから始めてみる必要があると思います。そして、今回の緊急事態がwithコロナ、postコロナ時代の子どもたちの真の「育ち」と「学び」を考え直し、そのために子どもが子どもらしく過ごすことができる「子ども時代」を確実に保障する契機になることを期待したいと思います。